

佐和田町の文化財

— 平成15年度改訂版 —

佐和田町教育委員会

佐和田町文化財の改訂によせて

この度、佐和田町が平成16年3月1日より、佐渡市へと生まれ変わるのを機会に、文化財指定をされた佐和田に伝わる文化財をまとめて、平成15年度版として改訂することになりました。それがこの『佐和田町の文化財』平成15年度版であります。

佐渡島は、自然環境の宝庫であるばかりではなく、文化、民俗芸能、工芸等、文化財の宝庫であります。佐和田もその例外ではありません。

我々自身も、有形、無形の文化財の影響を受けていますし、また、これを継承していく義務もあります。我々は先人達の優れた文化活動に学びながら、これを新しい佐渡市へバトンタッチしていく使命があります。

佐渡市への合併という歴史的な節目に、冊子ができあがった喜びを皆さんと共に分かち合い、この冊子が、島民各位に受け渡されて、継承、発展されていくことをご祈念いたします。

また、文化財保護審議委員並びに関係各位の並々ならぬご努力により、このたび、発刊をみることになりました。各位のご努力に対し、深く感謝申し上げます。

平成16年2月

佐和田町教育委員会

教育長 岩 田 伸

目 次

I. 国指定文化財

(1) 重要無形民俗文化財

民俗芸能	佐渡人形芝居	2～ 3
------	--------	-------	------

II. 県指定文化財

(1) 有形文化財

絵	画	翁・三番叟絵扁額、三十六歌仙絵扁額	6～ 7
---	---	-------------------	-------	------

(2) 無形文化財

工芸技術	佐渡蠟型鑄金技術	8～11
------	----------	-------	------

(3) 史跡名勝天然記念物

天然記念物	乙和池の浮島及び植物群落	12～13
-------	--------------	-------	-------

(4) 選定保存技術・保持者

工芸技術	佐渡茅葺職人	14～15
------	--------	-------	-------

III. 町指定文化財

(1) 有形文化財

建	造	物	励風館	18～19	
建	造	物	沢根籠町の善宝寺	20～21	
建	造	物	二宮神社能舞台	22～23	
建	造	物	白山神社能舞台	24～25	
建	造	物	八幡若宮神社能舞台	26～27	
彫		刻	木食行道作大黒天	28～29	
彫		刻	木食行道作子育て地藏	30～31	
彫		刻	二宮神社狛犬	32～33	
彫		刻	実相寺仁王像	34～35	
絵		画	妙照寺涅槃図	36～37	
絵		画	洛中洛外図屏風	38～39	
絵		画	普門品註画	40～41	
絵		画	金剛界・胎藏界両部曼荼羅図	42～43	
古	文	書	真光寺村慶長検地帳	44～45	
典		籍	佐渡国寺社帳	46～47	
考	古	資	料	二宮加賀次郎遺跡出土遺物	48～49

(2) 無形文化財

工 芸 技 術	八幡箆笥製造技術	50～51
---------	----------	-------

(3) 有形民俗文化財

工 芸 品	八幡人形の型	52～53
彫 刻	鈴木家石風呂	54～55
絵 画	白山神社絵馬	56～57

(4) 無形民俗文化財

民 俗 芸 能	金北山神社例祭神事	58～59
---------	-----------	-------

(5) 史跡名勝天然記念物

史 跡	小沢窯跡	60～61
史 跡	中山旧街道	62～63
史 跡	中山の一里塚	64～65
史 跡	八幡砂垣	66～67
史 跡	芭蕉荒海の句碑	68～69
史 跡	金北山成就院真光寺跡	70～71
天然記念物	三光の杉	72～73
天然記念物	沢根層貝立	74～75
天然記念物	タブノキ群落	76～77
天然記念物	沢根崖	78～79
天然記念物	真光寺のブナ	80～81

IV. 指定文化財一覧表

指定文化財一覧表	84～85
佐和田町文化財位置図	86

I . 国指定文化財



文 弥 人 形

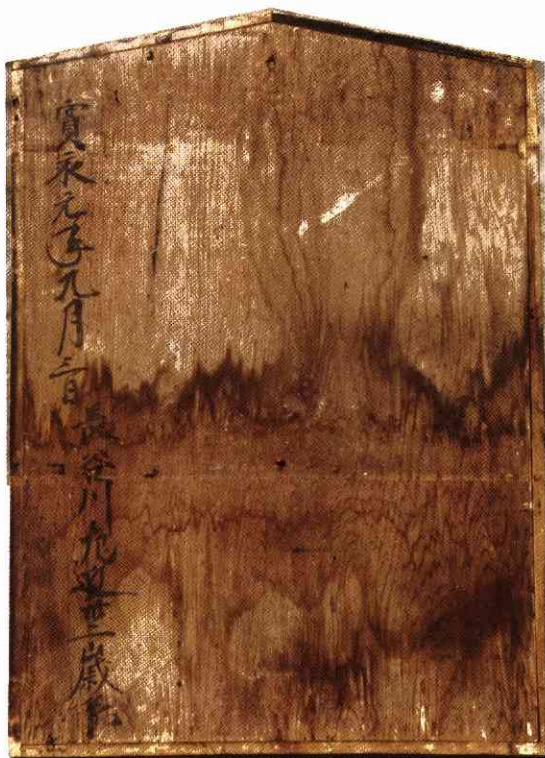
(1) 国指定重要無形民俗文化財

種 別	民俗芸能
名 称	^{さ ど} 佐渡 ^{にんぎょう} の人形芝居 ^{しばい}
指定年月日	昭和52年5月17日
所 在 地	両津市・佐渡郡
保 持 団 体	佐渡人形芝居保存会

佐渡の人形芝居は、1人で1体の人形を操る古浄瑠璃^{あやつ こじょうるり}の形式を残すもので、佐渡には文弥人形^{ぶんや}・説経人形・のろま人形がありますが、佐和田町では文弥人形が伝承されています。

文弥人形は、小木町の説経人形使い大崎屋松之助と沢根の文弥語り伊藤常盤一によって創められた人形芝居で、今から約300年前に京都の岡本文弥が創始した文弥節を下地として、新穂の須田五郎左衛門が京都から持ち帰った説経語りの人形を改良したものが使われました。芝居には、近松門左衛門の「国姓爺合戦^{こくせんや がっせん}」などの作品が取り入れられ、独特な哀愁^{あいしゅう}を帯びた節まわしや時には勇ましく動きまわる人形などが佐渡の風土にあったことから、広く島民に親しまれて、最盛期には座の数も40数座を数えました。しかし大正時代末期ころから後継者が減り、終戦頃には消滅の危機を迎えました。このような背景のなかで、昭和52年（1977）、この人形を島ぐるみで保存させようと佐渡人形芝居保存後援会が設立され、同年5月には国の重要無形民俗文化財に指定されました。その後、佐渡人形芝居保存会長の北見角太郎や人形遣いの第一人者であった浜田守太郎らの熱意と指導によって、人形芝居に対する人々の関心が高まり、今では10数座を数えるまでになりました。佐和田町でも現在交栄座^{こうえいざ}と松栄座^{しょうえいざ}が活動を続けています。

II. 県指定文化財



裏面墨書



三番叟絵扁額



裏面墨書



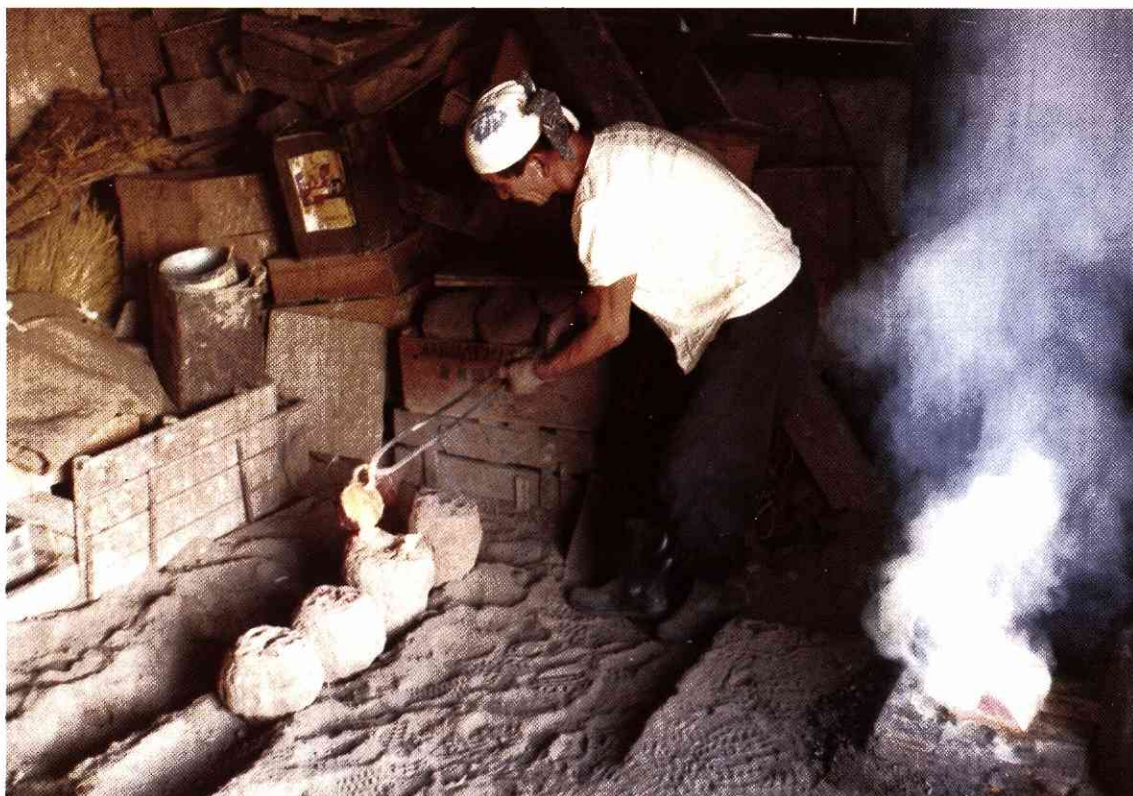
三十六歌仙絵扁額（中務）

(1) 県指定有形文化財

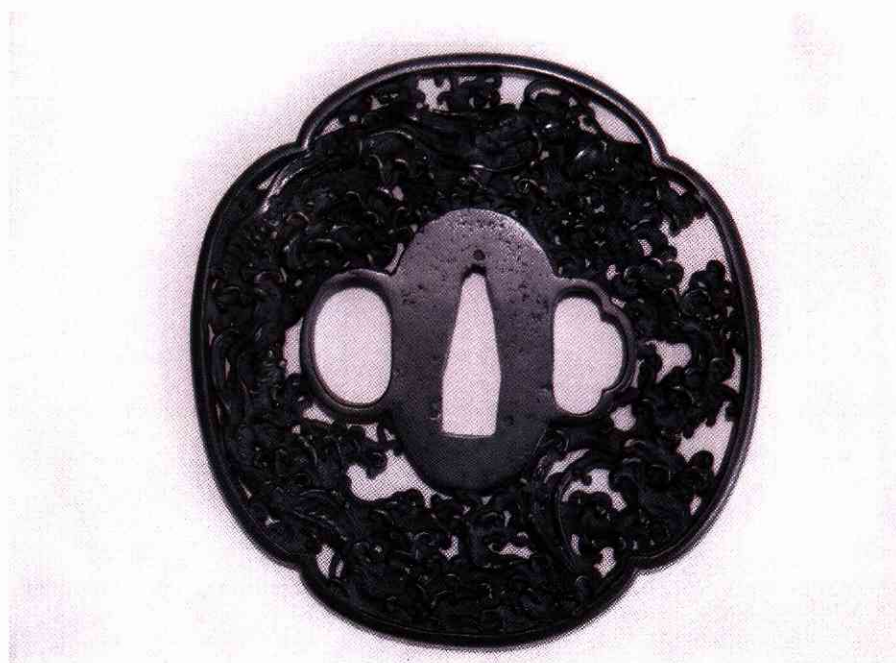
種	別	絵画
名	称	<small>おきな</small> 翁・ <small>さんばそうえへんがく</small> 三番叟絵扁額、 <small>さんじゅうろっかせん えへんがく</small> 三十六歌仙絵扁額
指 定 年 月 日	平成6年3月29日	
所 在 地	佐和田町大字市野沢856番地	
所有者又は管理者	実相寺（住職 佐渡友恵隆）	

室町時代以降、寺社に歌や馬などの絵を扁額（へんがく 絵馬）にして奉納することが盛んになります。実相寺に奉納された「おきな 翁・さんばそうえへんがく 三番叟絵扁額」は2面が残り、扁額は縦42cm、横29cm、厚さ0.7cmの年輪の密なヒノキの一枚板です。翁は半分ほど欠けていますが、三番叟は完全な姿で残り、ごふん 胡粉の下地を施した上に、三番叟の演者が極彩色で描かれています。裏面には墨書で「寛永元年（1624）九月三日 長谷川左近 卅二歳筆」と書かれています。この人物は、安土桃山時代を代表する画人長谷川等伯の四男で、雪舟六代を称し、後に等重と改名した人物です。滋賀県マキノ町の海津天神社には、寛永7年（1630）に彼が描いた三十六歌仙絵扁額も伝えられているほか、水墨画や屏風絵なども残しています。能楽関係の扁額の古いものは、慶長15年（1610）の石川県七尾総社の「翁」が知られており、本扁額はこれに並ぶものといえます。

実相寺に残る「三十六歌仙絵扁額」は残欠した3面を含む18面が残され、それぞれに歌人の姿とその歌が描かれています。また、たいらのかねもり なかつかさ 平兼盛と中務の扁額の裏面には「寛永元年（1624）十月二日 由次」の墨書があり、同寺の「おきな 翁・さんばそうえへんがく 三番叟絵扁額」よりひと月遅れて描かれたものです。その大きさ、額装の様子からみて、一具として製作されたものと考えられます。ただし、長谷川左近の描いた翁・三番叟絵扁額や海津天神社の扁額と比べると、筆づかいがやや異なり、長谷川左近本人が描いたというより、むしろ彼の周辺にいた長谷川派の画家の手によるものと考えられます。なお、本扁額の由来については明らかではありませんが、長谷川派の研究史上、貴重な資料といえます。



型に銅合金を注入する作業



初代本間琢斎作品

(2) 県指定無形文化財

種 別	工芸技術
名 称	佐渡の蠟型鑄金技術 <small>さど ろうがたちゅうきんぎじゅつ</small>
指定年月日	昭和53年12月26日
所 在 地	佐和田町
保 持 団 体	佐渡蠟型鑄金技術保存振興会

佐渡の蠟型鑄金技術は、初代本間琢斎ほんまたくさいが弘化4年（1847）に佐渡奉行中川飛騨守より委嘱されて、沢根の鶴子つるしで大砲を鑄造し、砲身の模様を蠟型で鑄造したことが始まりと言われ、以来沢根を中心にその製法が広まりました。中には人間国宝となった佐々木象堂氏などが活躍しましたが、現在島内の鑄造家は佐和田町に在住する2氏だけとなりました。

蠟型鑄金は、蜜蠟みつろうを主体とする練り合わせ蠟で作品の原型を作り、それを土で塗り覆います。土が乾燥したら湯口を下にして窯かまの中で蠟を溶かして土より流出させて、空洞になったところへ溶かした銅合金（銅・鉛・錫・亜鉛なまり すず あえん）を注入します。この後仕上げ着色の工程を経て完成する一品製作の美術品です。着色工程では、使用する薬品により、古銅色、青銅色など数種類の色を引き出しますが、なかでも代表的なものに斑紫銅色はんしどうという特別な技法があり、この技法を編み出した初代の本間琢斎より代々引き継がれています。

昭和53年、佐渡の蠟型鑄金技術として新潟県の無形文化財に指定されました。

〔佐渡蠟型鑄金技術〕

所 在 地 佐和田町大字沢根箆町 1 3 番地

技術保持者 本間琢治

初代本間琢斎は、越後刈羽大久保村の鑄工であった原得斎の長男として生まれ、文平と称しました。佐渡奉行中川飛騨守に招かれて、沢根の鶴子で大砲を数十門鑄造しています。後に沢根箆町の本間六兵衛家へ入婿し、鑄造業を創めました。これが佐渡銅器の始まりです。梵鐘・灯籠などの作品には本間六兵衛藤原貞信と刻銘してあるものが多く、文房具等の小品には無銘の名作も多く残ります。

二代本間琢斎は、初代の長男として生まれ、貞蔵と称しました。2人の弟（初代土屋宗益、初代本間琢磨）と共に鑄金の技術の練磨に励みました。作風は精巧緻密で、初代本間琢斎の受賞作品の半ばは二代琢斎の作であったといわれます。

三代琢斎は、金井和泉村の本間儀平の長男として生まれ、雄兎八と称しました。明治24年（1891）に本間家に入婿し、二代琢斎について鑄金技術を習得しました。三代琢斎を襲名後、その技はますます磨かれ、愛好者から賞賛されるようになり、展覧会などに出品し、多数の作品が受賞しています。

四代琢斎は、三代琢斎の長男として生まれ、久雄と称しました。東京美術学校彫刻科を卒業後、家業を継ぎ、伝統にこだわらず、新しい傾向の作品を作りました。また、島内で初めて胸像の製作を行いました。

五代琢斎は、四代琢斎の次男として生まれ、真二と称しました。徴兵、シベリア抑留、復員後、兄が戦死したため、父四代琢斎についてその技術を習得し、また、上京して同郷の斉藤玉城氏より込型鑄造法を習得しました。四代の戦後の作品の総ては五代の鑄造仕上げによるものです。四代没後は、蠟型鑄金、斑紫銅色の技術保存に尽力しました。

本間琢治は、五代琢斎の長男として生まれ、武蔵野美術大学彫刻学科に入学し、同大学卒業すると、東京に留まり、人間国宝斉藤明氏に師事して鑄金の技術を磨き、昭和57年（1982）帰郷して、五代琢斎のもとで技術練磨に励み、若手の一人として活躍を続けています。

〔佐渡蠟型鑄金技術〕

所 在 地 佐和田町大字沢根五十里 1 1 1 0 番地

技術保持者 三代 宮田藍堂

初代宮田藍堂^{みやたらんどう}は、父兵助の長男として安政3年（1856）に生まれ、伝平と称しました。初代本間琢斎に可愛がられるうちに芸術観が磨かれ、4年間の修行を経て、上京して諸氏を訪れていた際に東京美術学校に招かれて、岡崎雪声の助手として、楠公銅像製作に寄与しました。明治35年（1902）帰島して開業しました。島内には聖観音像等が残されています。

二代藍堂は初代の三男として生まれ、実と称しました。父の高弟佐々木象堂を訪れ、2年の修行を積んだ後帰郷して開業しました。帝展、文展、日展を通じ入選作が多数あります。勲五等瑞宝章、ソ連文化賞、第四銀行賞（功労賞）などを受賞しています。

三代藍堂は二代藍堂の長男として生まれ、宏平と称しました。東京美術学校（現在の芸大）工芸科鑄金部に入学し、卒業後東京で開業しましたが、手腕を認められて母校芸大で教鞭をとり子弟の育成に励みながら、新感覚で?型鑄金や斑紫銅色の技術を活かして、他の金属（金、白銅、錫、アルミニウム、ステンレス）を素材とした新しい分野の開発に取り組んできました。父の死後平成6年（1994）11月3日に三代を襲名して現在に至っています。



乙和池の浮島

(3) 県指定史跡名勝天然記念物

種別	天然記念物
名称	<small>おとわ いけ うきしま しよくぶつ ぐんらく</small> 乙和池の浮島及び植物群落
指定年月日	昭和38年3月22日
所在地	佐和田町大字山田1600番地
所有者又は管理者	長福寺・佐和田町教育委員会

おとわいけ 乙和池は、大佐渡山脈を走る大佐渡スカイラインを登ったところにある大平おおだいら高原に近い林道を600mほど入った海拔560mのところにあります。周囲の地形は小起伏を成して、自然林のブナ・ミズナラを主とする落葉広葉樹林に囲まれた静かで神秘的な場所です。県内にはいくつかの深山の天然池がありますが、周囲が高木の自然林に囲まれ、浮島が存在するものはこの乙和池だけです。しかも越後に比べて山の浅い大佐渡山脈の中にこのような池が存在することは大変珍しいことです。

乙和池の周囲の樹林にはミズナラを優占種とするブナ・ハウチワカエデ・ヤマモミジがあり、これらの下にはハイイヌガヤが多く見られ、林床の草木ではりんしょうミヤマカンسゲが極めて多く見られます。池と周囲の落葉広葉樹林全体で約200種の植物が確認されています。浮島の面積は約400㎡で、ノハナショウブ・サヤヌカグサ・エゾミソハギ等の草木群落と2～3mの腐食層ふしょくから成り立っています。また、島の中には井戸と呼ばれる穴があって、島が浮揚ふようする役目を果たしているといえます。

この池には池の主である大蛇に見初められて入水した乙和の伝説が語り継がれており、昔から神秘的な場所として知られてきました。



茅 葺 作 業 風 景



茅 葺 職 人

(4) 県選定保存技術・保持者

種 別	工芸技術
名 称	<small>さ ど かやぶき しょくにん</small> 佐渡茅葺職人
指定年月日	平成12年3月24日
所 在 地	佐和田町大字沢根五十里
技術保持者	中川若松、中川稔、本間 弘

かやぶきやね

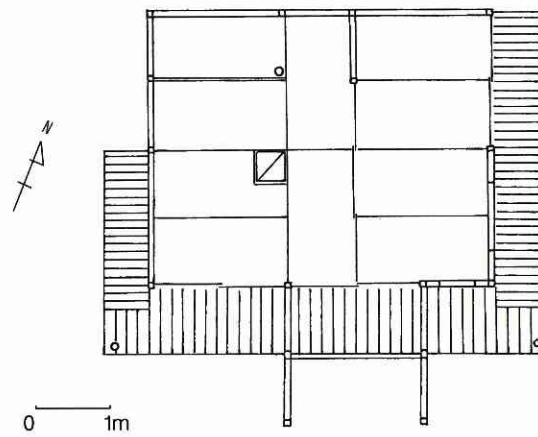
茅葺屋根の民家は、日本の原風景といわれ、かつて日本で多く見られた光景でした。それは佐渡でも例外でなく、かつては農家などの家屋でよく見られ、佐和田町でも昭和10年に496軒あった茅葺屋根が現在は数軒となってしまいました。佐渡の茅葺屋根の特徴は長いカヤを使うところにあり、風の強い佐渡の気候を考慮したものです。また、葺き場所によってヨシ、ワラ、ムギワラなどが使われたそうで、佐渡では茅葺屋根を「クズ屋根」、「カヤ屋根」と呼んでいます。

茅葺屋根の葺き替えには屋根葺き組を組んで、その仲間がカヤを持ち寄り、8人位の職人の手で、2、3日の短期間で葺きあげました。このため、親方には数人の弟子がいて、農閑期に行われる屋根葺きの日程を手配して人数を確保しました。10数軒の仲間が組になって、各人が2ヒキ（3.6mの縄でしめたカヤの束2つ）持参しながら無償で手間を出して葺きました。佐渡の茅葺は、職人や材料の不足、葺き替えに手間がかかることから徐々に姿を消し、佐渡茅葺の技術をもつ職人は数人となってしまいました。

Ⅲ. 町指定文化財



励風館



励風館平面図

(1) 町指定有形文化財

種	別	建造物
名	称	<small>れいふう かん</small> 励風館
指 定 年 月 日	昭和48年7月20日	
所 在 地	佐和田町大字沢根五十里982番地5	
所有者又は管理者	三井あき子、金子達彌	

れいふうかん
励風館は、やじまかずえ
沢根五十里の酒屋の主人であった矢島主計が、文化7年(1810)
に茶室造りの離れを仮塾舎としたもので、この年、主計の師であるかめだほうさい
亀田鵬斎が数ヶ月の間、論語などを講じたといえます。この励風館建設は、文政8年(1825)
に建設された官学の相川修教館に先立つこと15年、実に佐渡における学校創
立の初めとも言うべきものです。館名の由来は、「び微をひら孤島にえんえい啓き風を遠裔に
はげ励ます」から励風の2字をとり、文化の遅れている佐渡を啓発し、学問を奨励
するために名付けられたものです。この学舎を拡大充実するために、文化11
年(1814)亀田鵬斎から400字に余る名撰文「新建佐州五十里郷励風館記」
がよせられました。しかし、奉行所の私学に対する弾圧もあり、大規模な講堂
の建設は果たされませんでした。

創建者である矢島主計は、安永4年(1755)に沢根五十里の田中町に生ま
れ、若い頃に江戸へ出て亀田鵬斎に学び、漢学者のみにとどまらず、詩歌俳諧
を良くし、荒野の開墾や窯業など様々な業績を残した人物です。

現在の建物は、河原田町中山五兵衛家に保存してあったものを「鵬斎先生遺
跡保存会」の方々が、昭和26年(1951)に現在の位置に再建したものです。
また、励風館の脇には沢根出身の文芸評論家「青野季吉ペンの碑」が建てられ
ており、碑の下には季吉の愛用した万年筆が納められています。



善 宝 寺

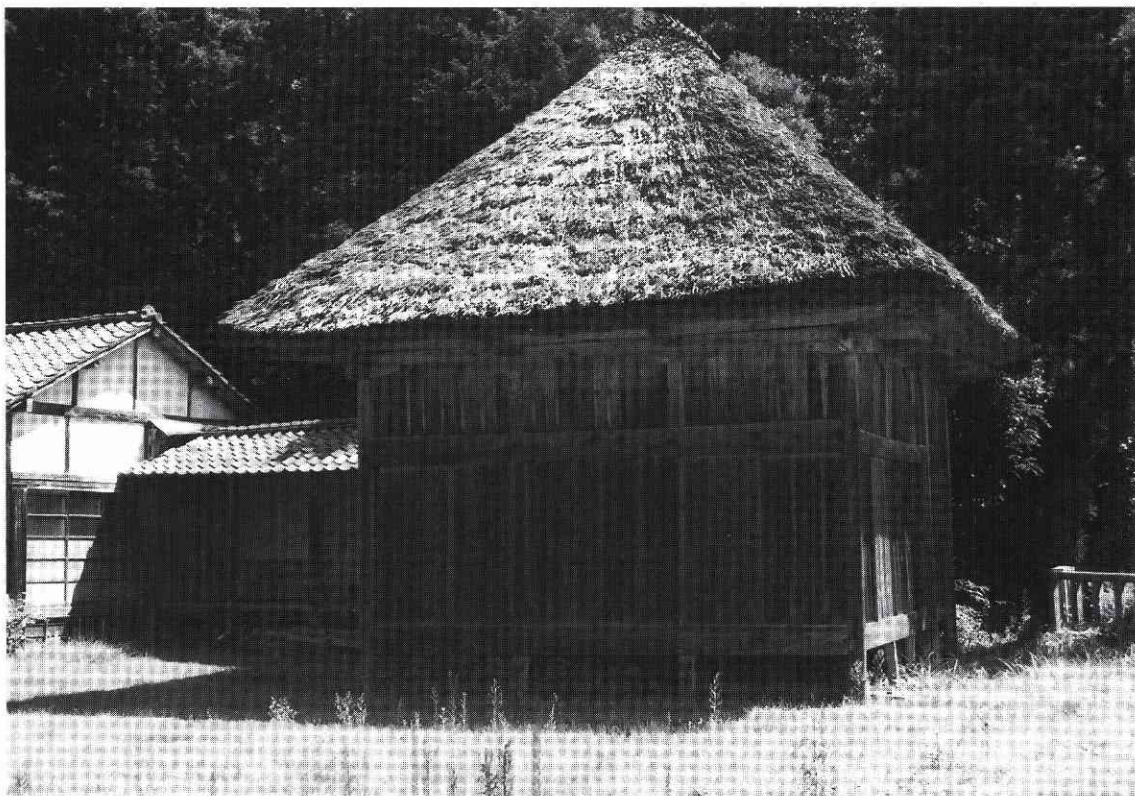
(1) 町指定有形文化財

種	別	建造物
名	称	<small>さわね かごまち ぜんぼうじ</small> 沢根籠町の善宝寺
指 定 年 月 日	昭和51年3月29日	
所 在 地	佐和田町大字沢根籠町23番地1	
所有者又は管理者	総鏡寺（住職 中村泰裕）	

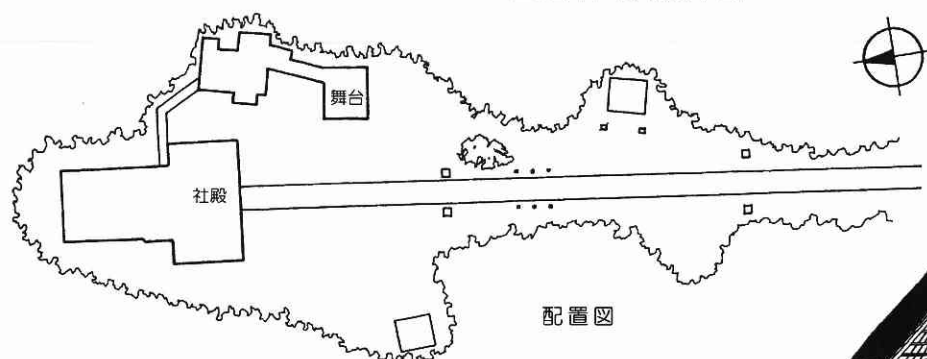
沢根籠町の小高い丘に曹洞宗の臨江山総鏡寺があり、その境内の南側に善宝寺の一字があります。漁業の盛んであった頃には、この町だけでも30隻に余る漁船があり、海上の安全と大漁を祈る善宝寺信仰が大変厚かったようです。このような堂宇は明治の初期まで、沢根から河原田の磯伝いに7ヵ所もありましたが、窪田ではその痕跡もなく、沢根地区に残るものも位置が変わったり、改築されたりして、昔の姿を残すものはこの寺のものだけとなりました。

総鏡寺の善宝寺は、基盤2.2m四方、高さ1.8mあり、美しい稜^{りょう}の石積みの上に安置され、堂宇の間口、奥行ともに1.2m四方、高さは屋根裏^{たるき}の垂木まで1.85mあり、屋根は宝形造^{ほうぎょうづく}りで四方の蛙股^{かえるまた}に支えられています。屋根の下は二つ軒垂木に造られ、瓦葺屋根、正面唐戸に日天月天の彫り、左右は鯉の滝昇り等、巧みな細工が施されています。この堂宇は沢根籠町の明石近蔵（初代近陽）の作です。

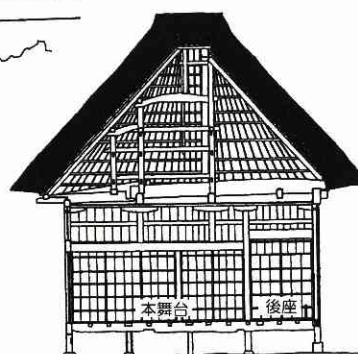
かつては日の入りとともに灯明があげられて、海上の安全を祈り、夜には灯台の役割も果たしたといわれます。



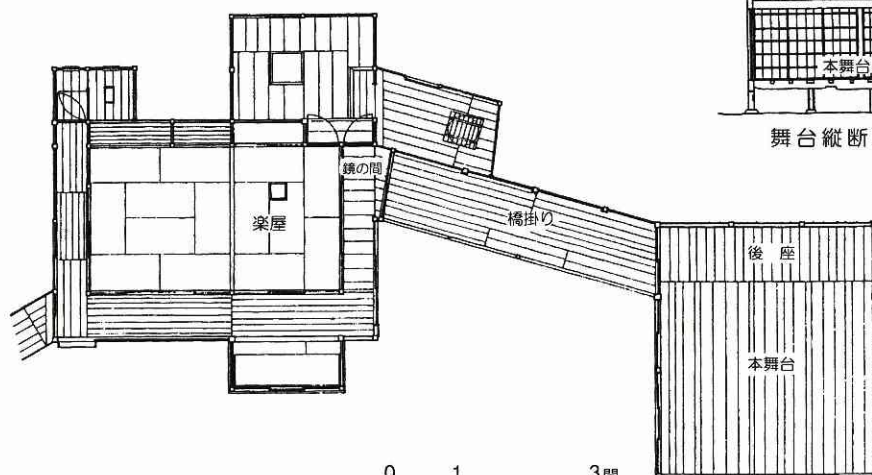
二宮神社能舞台



配置図



舞台縦断面図



0 1 3間

平面図

(1) 町指定有形文化財

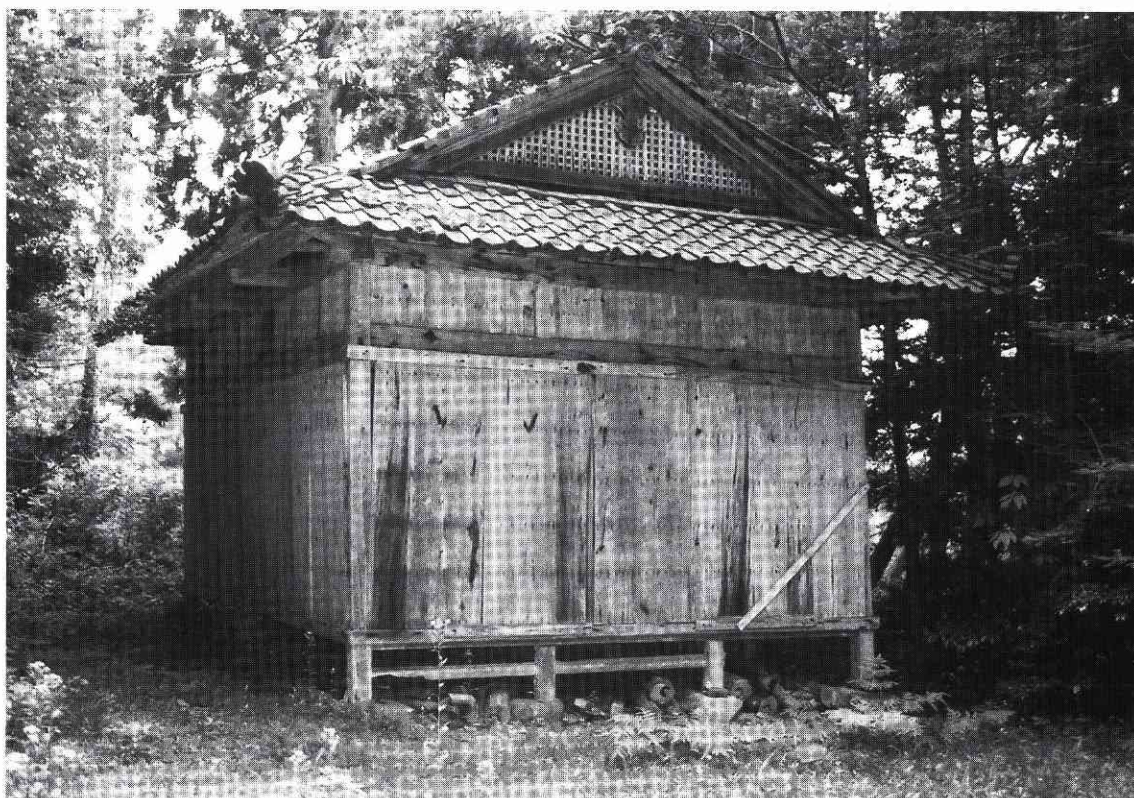
種	別	建造物
名	称	<small>にくうじんじゃ のうぶたい</small> 二宮神社能舞台
指 定 年 月 日		平成15年9月9日
所 在 地		佐和田町大字二宮232番地2
所有者又は管理者		二宮神社（宮司 森谷雅勝）

二宮神社は、順徳天皇の第二皇女忠子姫を祭神とする神社で、県道妙照寺佐和田線を上った東二宮の集落の中に存在します。社殿の南東にある能舞台は独立式のもので、舞台は鏡の間や楽屋を兼ねる社務所しゃむしよから橋掛りで連結されています。現存する能舞台がいつ頃建てられたものかはわかりませんが、文久3年（1863）の佐渡定能場届（本間家文書）には、二宮神社の名前が見えているので、幕末から明治初年にはすでに能舞台が存在していたと考えられます。

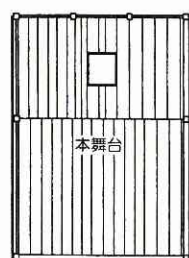
舞台は寄棟造り、茅葺きで、西側に間口5.5m×奥行4.6mの舞台と東側に1.8mの後座とし、床の高さは84cmです。天井は後座まで棹縁天井さおふちで、本舞台と後座を区間的な分節はせず、鐘穴も存在しません。また、鏡板に松の絵も描かれていません。この北面につく橋掛りは、瓦葺きの建物で、長さ7.3m、幅1.8mです。

昭和30年代と昭和50年代に演能が行われており、使われなくなった他の舞台に比べ、比較的使用されることが多いようです。

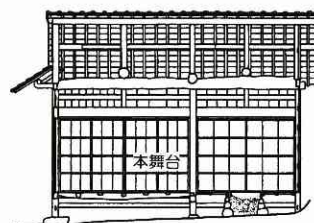
島内に多く残っていた能舞台も現在は33ヵ所が残るのみとなり、二宮神社の能舞台も佐渡で盛んであった芸能の場として貴重な遺構です。



白山神社能舞台

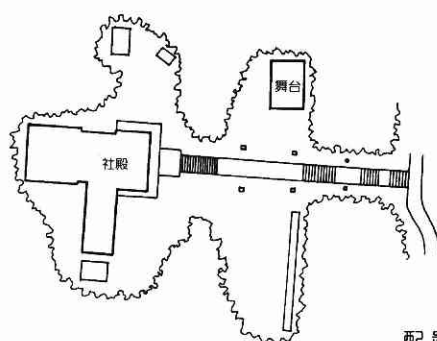


平面図



舞台横断面図

0 1 3間



配置図



(1) 町指定有形文化財

種	別	建造物
名	称	<small>はくさんじんじゃ のうぶたい</small> 白山神社能舞台
指 定 年 月 日		平成15年9月9日
所 在 地		佐和田町大字山田150番地
所有者又は管理者		白山神社（宮司 矢田有年）

石田川の支流である山田川を上流に上っていくと山間に白山神社があります。当社は、祭神は伊邪那美尊いざなみのみことで、『佐渡神社誌』によれば弘仁3年の創立といわれます。社殿の南東の一段低い場所にある能舞台は独立式のもので、橋掛りはありません。現存する舞台がいつ頃建てられたものかはわかりませんが、『佐渡国略記』によれば、慶安4年（1652）9月9日に神事能が行われたという記録が残っており、古くから能の盛んな地域であったといえます。明治23年の神社明細帳には能舞台の記録が残っていますので、幕末から明治初年頃には現存する能舞台が建てられていたと考えられます。

舞台は西側が入母屋造りいりもやつく、東側が切妻造り、瓦葺きで、長方形の建物は西側に本舞台4.6m×奥行3.7m、東側に間口4.6m×奥行4mの囲炉裏の切られた楽屋があり、能舞台の床の高さは77cmです。舞台と楽屋を仕切る鏡板はなく演能の際に幕で仕切りました。橋掛りは演能の際に仮設しました。島内に多く残っていた能舞台も現在は33ヵ所が残るのみとなり、白山神社の能舞台も佐渡で盛んであった芸能の場として貴重な遺構です。

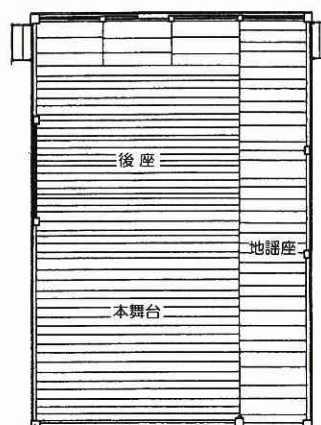


八幡若宮神社能舞台

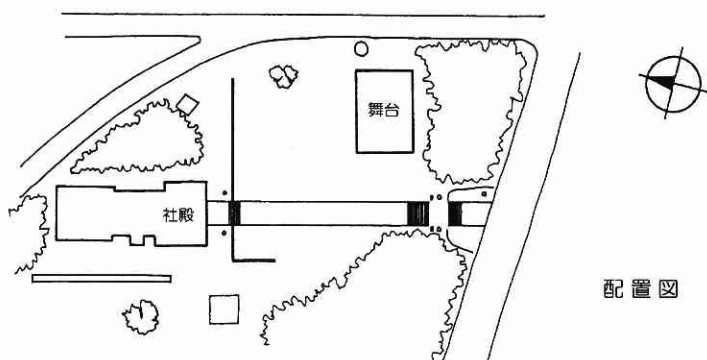


舞台縦断面図

0 1 3間



平面図



配置図

(1) 町指定有形文化財

種	別	建造物
名	称	<small>はちまん わかみやじんじゃ のうぶたい</small> 八幡若宮神社能舞台
指 定 年 月 日		平成15年9月9日
所 在 地		佐和田町大字下長木457番地1
所有者又は管理者		八幡若宮神社（宮司 近藤雅博）

国道360号線に面した場所に、仁徳天皇を祭神とする八幡若宮神社があります。社殿の南東の一段低い場所にある能舞台は独立式のもので、橋掛りはありません。現存する能舞台がいつ頃建てられたものかはわかりませんが、文久3年（1863）の『佐渡定能場届』（本間家文書）に八幡若宮神社の名が見えることから、幕末から明治初年頃に建てられたものと考えられます。

舞台は寄棟造り、瓦葺きで、東西に長い長方形の建物です。このうち神前にあたる北西角の5.4m四方が本舞台となり、舞台の東側に間口5.4m×奥行2.7mの後座、舞台の南側に間口4.6m×奥行1.8mの地謡座があります。舞台の床の高さは87.5センチです。天井は全体に張ってあり、鐘穴があります。

昭和初期まで4月3日の祭礼には必ず定能が行われていましたが、現在は行なわれていません。

島内に多く残っていた能舞台も現在は33カ所が残るのみとなり、八幡若宮神社の能舞台も佐渡で盛んであった芸能の場として貴重な遺構です。



大黒天像

(1) 町指定有形文化財

種	別	彫刻
名	称	<small>もくじぎぎょうどうさくだいこくてん</small> 木食行道作大黒天
指 定 年 月 日		昭和48年11月20日
所 在 地		佐和田町大字八幡2047
所有者又は管理者		山中武久（佐渡博物館管理）

この大黒天像は木食行道もくじぎぎょうどうの作で、カヤ材の一木造り、像の高さ94cm、像の幅38cm、木地のままの姿です。顔には微笑をたたえ、俵・瓢箪・宝珠・鼠たわら ひょうたん ぼうじゆ ねずみを配しています。像の背面には「天下和順 日月清明 七難即滅 …… 七福即来 日本回国 木食（花押） 天明二年（1782）寅ノ六月子日」の墨書があり、木食行道の作であることを裏付けています。

本像は、もともと金北山山頂の金北山神社にあったものといわれ、文政5年（1822）4月～天保3年（1832）1月、泉本正助が佐渡奉行のときに行われた社殿修復に伴って発見され、奉行所に移されました。奉行が任期を終えて江戸に帰るとき、組頭であった河島才右衛門由負に授けられ、河島が江戸転役のうちに、広間役の山中喜寛が預り受けることとなり、山中家に移されて、代々引き継がれたものといえます。本像は金北山への木食行道の祈願を示す彫刻であるとともに、佐渡における木食信仰の一面を知る資料として貴重なもので、現在は佐渡博物館で委託展示されています。



子育て地藏

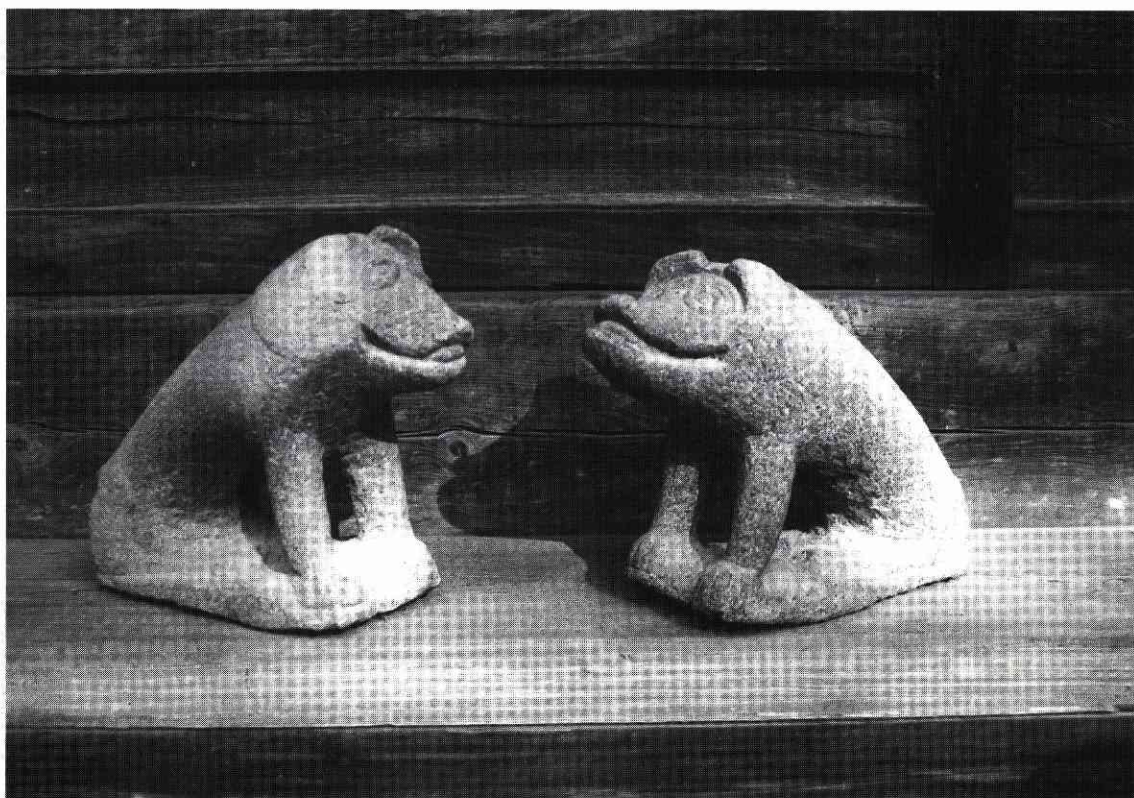
(1) 町指定有形文化財

種	別	彫刻
名	称	<small>もくじぎょうどう さく こ そだ じぞう</small> 木食行道作子育て地蔵
指 定 年 月 日		昭和48年11月20日
所 在 地		佐和田町大字真光寺816番地
所有者又は管理者		円照寺（住職 渡部昭義）

もくじぎょうどう
木食行道作の子育て地蔵は、シナの木の一木造りで、台の高さ6cm、体の長さ44.5cm、胴の幅13.7cm、仏面の長さ8.7cm、全高50.5cm、木地のままです。

ぜんこくあんぎゃ
全国行脚を行っていた木食行道が佐渡を訪れたのは、天明元年（1781）で、5月23日小木に着きました。『納経帳』及び『国々御宿帳』には、6月2日に真光寺に泊ったことが明記されており、出発した日は不明ですが、同月5日には石名の清水寺に参拝していることから、同地に2、3日は泊ったと思われます。

子育て地蔵は、真光寺滞在中に彫られたものなのか、また、それを宿坊に残したのか、信者に授けたのかは不明ですが、いつの頃からか真光寺村高野の高本治右衛門家に伝わりました。高本家では邸内の小祠しょうしに安置して、明治の中頃まで、この地蔵を背負って各地を歩き、妊産婦がいと安産と育児を祈祷していたので、ひろく島内の婦人から信仰を集めたといわれます。昭和40年（1965）に同家の一女により菩提寺である円照寺に納められました。木食行道が彫ったこのような子育て地蔵は、島内では両津市大字和木に一体伝わるだけで（現在両津市郷土博物館で保管）、貴重なものといえます。



二宮神社狛犬

(1) 町指定有形文化財

種	別	彫刻
名	称	二宮神社 ^{にくうじんじゃこまいぬ} 狛犬
指 定 年 月 日	平成3年3月1日	
所 在 地	佐和田町大字二宮232番地2	
所有者又は管理者	二宮神社（宮司 森谷雅勝）	

狛犬は神社の参道入口に神様の守護役として祀られているものが多く、佐渡における古い石の狛犬は、小木町の木崎神社、小比叡^{こびえ}神社のものとされ、室町時代末期のものといわれています。

この狛犬は、二宮神社の内陣（神社の本殿で神体を安置してある場所）に祀ってあるもので、体長が約50cmあり、小木町のものと比べると大型です。石材は石英安山岩で、佐渡産です。台座ともに一石であり、目は大きくやや垂れ目で、耳が可愛い形をしていて、体毛が体一面に彫刻されています。口は玉などをくわえず、大きい口をしていますが開いておらず、歯は一切見えません。このため、一般的に見られるように威嚇^{いかく}するような顔をしていないため、優しくユーモラスな印象を与えます。口の阿^あ吽^{うん}の区別は顔面の上向きと下向きによって表現されています。

狛犬の製作者、製作年代ははっきりとわかりませんが、明治16年（1884）に書かれた二宮神社の『調べ書上げ』によると、「宝物 狛犬一对 足利時代作、本間佐渡守寄進と云う」とあり、この書上げ書のとおり足利（室町）時代の作と考えられます。



仁
王
像
(阿形)



仁
王
像
(吽形)

(1) 町指定有形文化財

種	別	彫刻
名	称	じっそうじ におうぞう 実相寺仁王像
指 定 年 月 日		平成11年11月9日
所 在 地		佐和田町大字市野沢856番地
所有者又は管理者		実相寺（住職 佐渡友恵隆）

仁王像は仏法護持のため寺門の両脇に置かれる仏像で、口の形により阿吽の二つに分けられています。実相寺の仁王像は、木製の彩色像で、阿形が像の高さ197cm、吽形が像の高さ193cmを測り、中国風の甲冑を身につけた力強い風格を持っています。実相寺に残る資料によると、「仁王尊像大坂より小木安隆寺へ上がる。…（中略）…御松（実相寺のこと）へ元和九年（1623）日尊代御越成られ候」と後年の覚書ながらも記述されています。仁王像の製作者は、像背面の墨書銘から、京都七条仏所の大仏師で法橋位をもつ康慶が製作したものであることが分かっています。康慶は鎌倉時代初期に彫刻界を支配した運慶の流れを汲む名門の出身です。

また、この仁王像は、子安仁王尊として地域の人に親しまれ、子供の無病息災を願って、今も仁王門に草鞋わらじがかけられています。



涅槃図



長谷川等玉の墨書と落款

(1) 町指定有形文化財

種	別	絵画
名	称	みょうしょうじ ねはん ず 妙照寺涅槃図
指 定 年 月 日		平成12年9月27日
所 在 地		佐和田町大字市野沢454番地
所有者又は管理者		妙照寺（住職 加門義龍）

ねはんず ^{しやか}釈迦が入滅したときの様子を描いたもので、^{さらそうじゅ}沙羅双樹の中央の宝台に、北枕、西向きに横になる釈迦を囲む^{しょぼさつ}諸菩薩、悲泣する^{まやぶにん}仏弟子、俗衆や動物たち、上空には急ぎ飛来する生母摩耶夫人たちの姿を描いたものです。この絵は、^{ねはんえ}涅槃会とよばれる釈迦の遺徳をたたえる行事に際して掛けられるもので、陰暦2月15日（現在の3月15日）に行なわれることが多いようです。涅槃会は古くは推古天皇（554～628）のときに奈良県の元興寺で行われたものが最初で、やがて全国の寺院や民間へ広まっていったといわれています。

妙照寺の涅槃図は縦3.28m、横3.58mの巨大なもので、画法、色彩に優れた作品です。また、画中には「雪舟八代長谷川等玉信雪筆」の墨書銘と^{らっかん}落款があり、本作品が長谷川等玉の筆であることが分かっています。



洛中洛外図屏風（右隻部分）

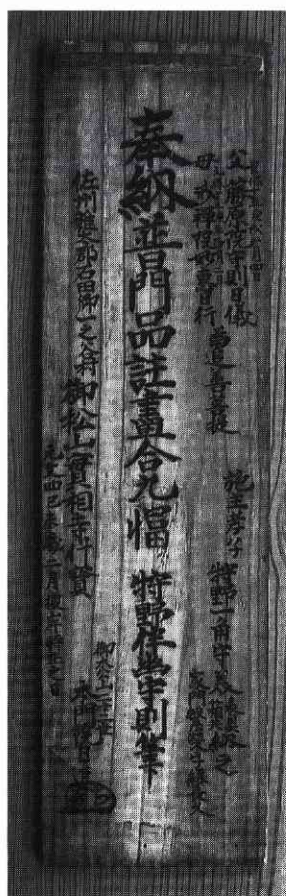
(1) 町指定有形文化財

種	別	絵画
名	称	<small>らくちゅうらくがい ず びょうぶ</small> 洛中洛外図屏風
指 定 年 月 日	平成13年7月11日	
所 在 地	佐和田町大字市野沢454番地	
所有者又は管理者	妙照寺（住職 加門義龍）	

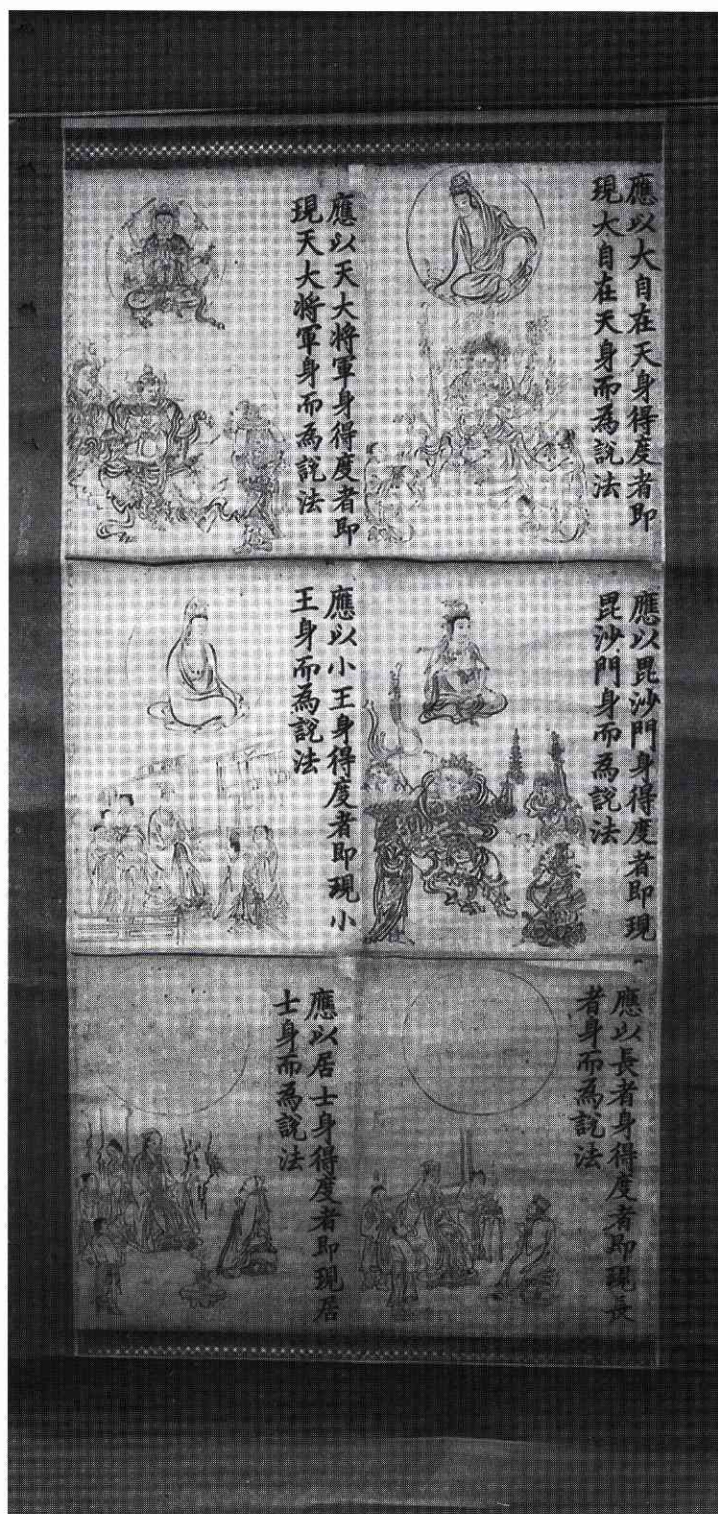
らくちゅうらくがいずびょうぶ
洛中洛外図屏風は、京都の洛中（市内）と洛外（郊外）の建物や、四季の風景、庶民の風俗を描いたものです。

妙照寺蔵の洛中洛外図屏風は、縦155cm、横360cmの六曲一双の屏風絵で、
うせき右隻（洛中）は北野社及び経堂を中心に描き、だいり内裏、二条城は省かれ、させき左隻（洛外）は鴨川かも以東の洛外にしぼられて描かれています。また、当時京都で生活していた庶民の情景が描かれています。この作品は江戸時代初期（17世紀前半～中頃）に制作されたものと考えられ、けいがんねんだい景観年代（屏風絵に表現された時代）は、屏風絵に描かれた建物によりおおよそ寛永初年（1624～1628）頃と推定されます。屏風絵の図柄は京都博物館本や池田家本に近く、池田家本は土佐派の作品ですが、京博本や妙照寺本は長谷川派の作と考えられます。同寺には長谷川等玉作のねはん涅槃図も伝わることから、何らかの関連があったようです。寄進者は特定できませんが、江戸時代に妙照寺の有力な檀越だんおつであった沢根の廻船問屋和泉屋佐次右衛門か、相川町の大酒屋椎野庄三郎のいずれかが寄進したものと考えられます。

佐渡では妙照寺のほかには、両津市の妙法寺に伝わるのみで貴重な物件です。



箱 書

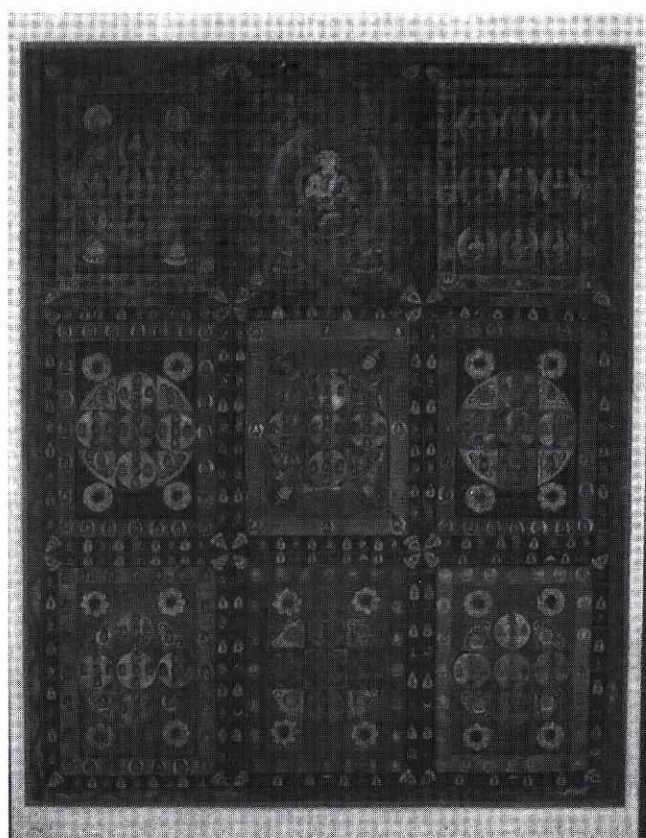


普 門 品 註 画

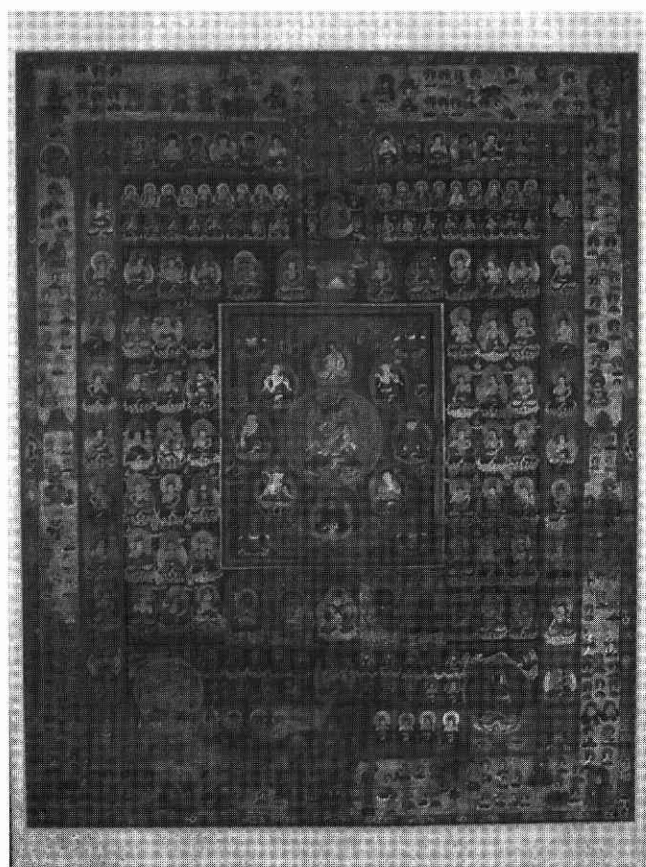
(1) 町指定有形文化財

種	別	絵画
名	称	<small>ふもんほんちゅうが</small> 普門品註画
指 定 年 月 日	平成15年5月12日	
所 在 地	佐和田町大字市野沢856番地	
所有者又は管理者	実相寺（住職 佐渡友恵隆）	

ふもんほんちゅうが 普門品註画とは、みょうほうれんげきょう 普門品（かんぜおんぼさつふもんほん 妙法蓮華經の第八之卷觀世音菩薩普門品）の經文の内容について絵を交えて分かりやすくしたもので、文はきちんとしたかいしょ楷書、絵は数多い人物に至るまで繊細な筆法で描かれています。註画の作者はかのうはん狩野胖幽で、ゆう胖幽は延宝2年（1674）、25歳の時に佐渡へ流罪となって以来、多くの作品を残していますが、註画形式の作画は他に例がなく、傑作の一つといえます。なお、箱書きに「奉納普門品註画九幅 狩野胖幽守則筆」、右上段には父と母のかいみょう戒名と没年、その下に「為追善菩提」、さらに下に「施主 孝子狩野一角守美 表具箱共納之」とあり、「元文四巳未歲二月彼岸時正之日」と施入の年月日も記してあります。一角は胖幽の4男で、父胖幽と母の追善のため、父の作「普門品註画」を元文4年（1739）の春の彼岸に実相寺へ納めた事が分かっています。時に実相寺22世日進の代でした。



金剛界曼荼羅圖



胎藏界曼荼羅圖

(1) 町指定有形文化財

種	別	絵画
名	称	<small>こんごうかい たいぞうかい りょうぶ まんだら ず</small> 金剛界・胎蔵界両部曼荼羅図
指 定 年 月 日	平成15年9月9日	
所 在 地	佐和田町大字沢根村1776番地	
所有者又は管理者	瑠璃山 曼荼羅寺（住職 渡部美津子）	

まんだら
曼荼羅寺は真言宗の寺院で、応永元年（1394）、沢根地頭であった本間攝津守の建立と伝えられています。当寺の什宝である曼荼羅図は、こんごうかいまんだら金剛界曼荼羅、たいぞうかいまんだら胎蔵界曼荼羅と呼ばれる2幅1対の軸物で、仏教の儀式などを行う際に本堂などに掛けて使用するものです。

金剛界曼荼羅図は、大日如来の絶対的な智慧を堅固な金剛石にたとえた言葉で、9つの部屋に分けて仏や菩薩ぼさつなどが描かれた絵は、仏教の精神的な世界観、仏から衆生しゅじょうへの教化のあり方と衆生から仏への修行のあり方を示すものです。

胎蔵界曼荼羅図は、仏によって衆生が本来持っている仏性を育て悟りの世界へ導いていく様子を図にしたものと言われ、中央の大日如来を初めとする409尊の仏、菩薩、明王、天部の諸尊がグループ別に12院を構成して描かれます。

寄進者である中山宗祐は、中山家（河原田本町）大屋の初代中山元忠のことで、父元茂の遺命により真光寺などの諸所に堂宇を再建した人物です。曼荼羅寺に伝わる曼荼羅図も彼によって正保4年（1647）に寄進されたものと考えられます。

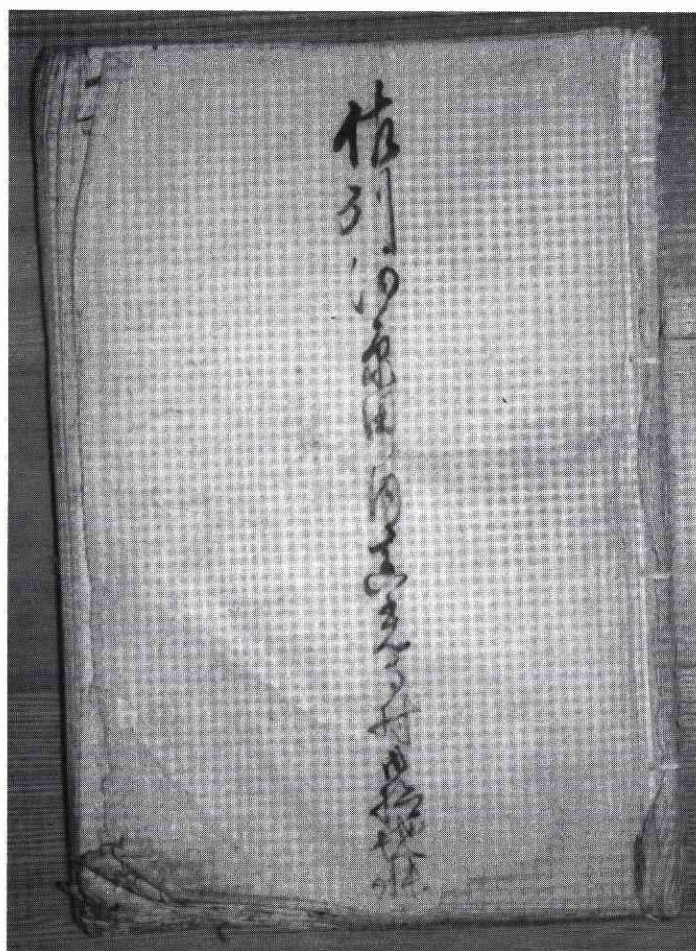
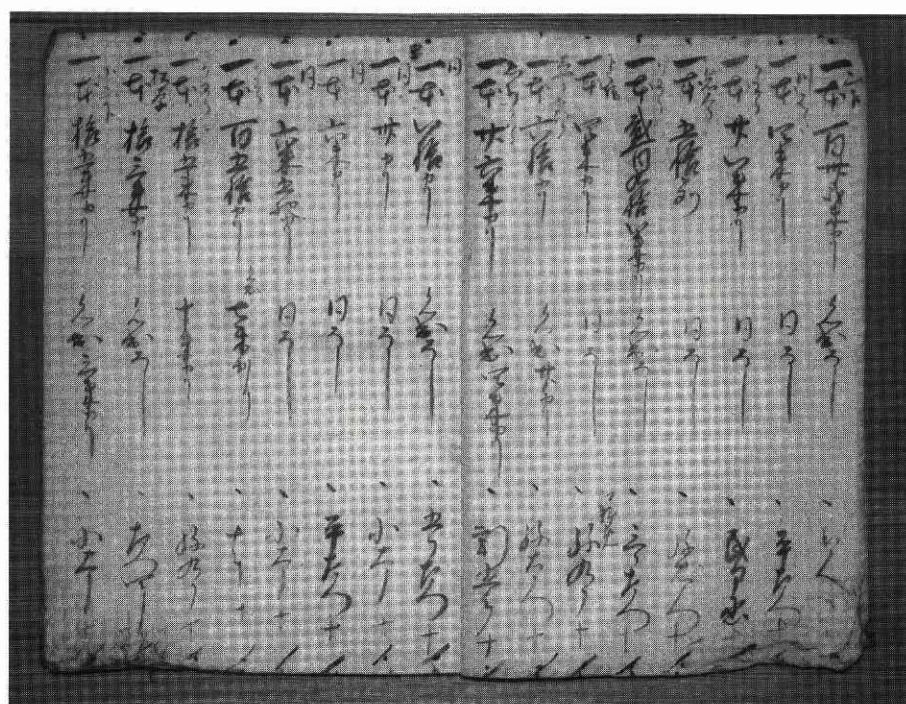


表 紙



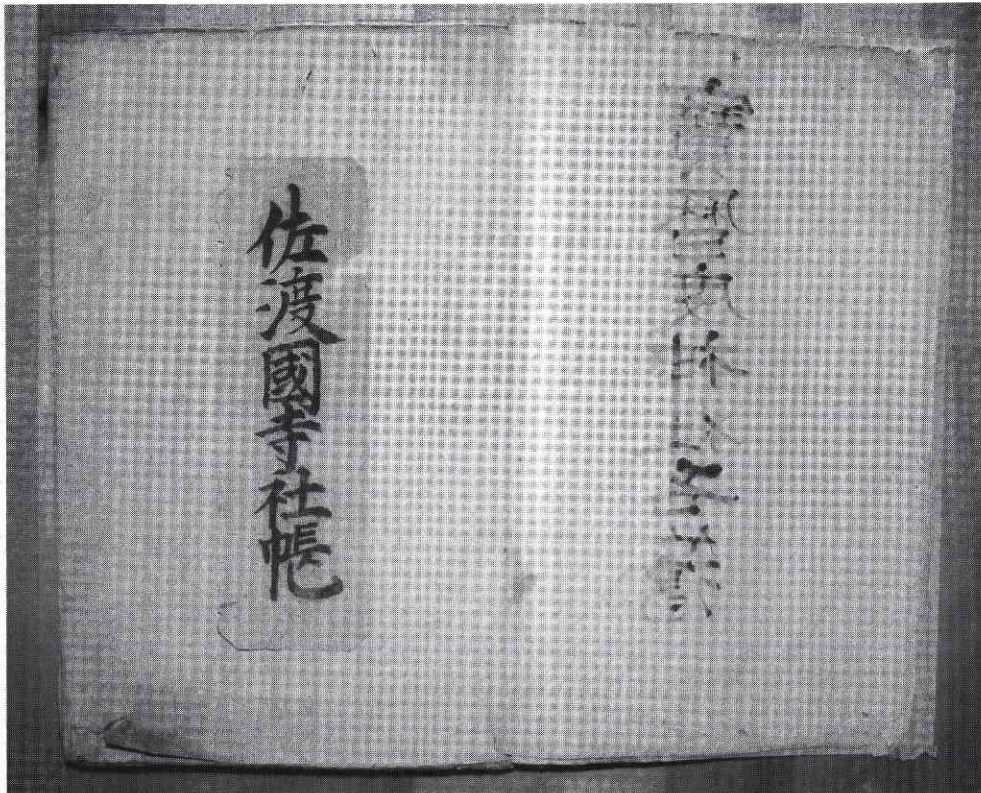
本 文

(1) 町指定有形文化財

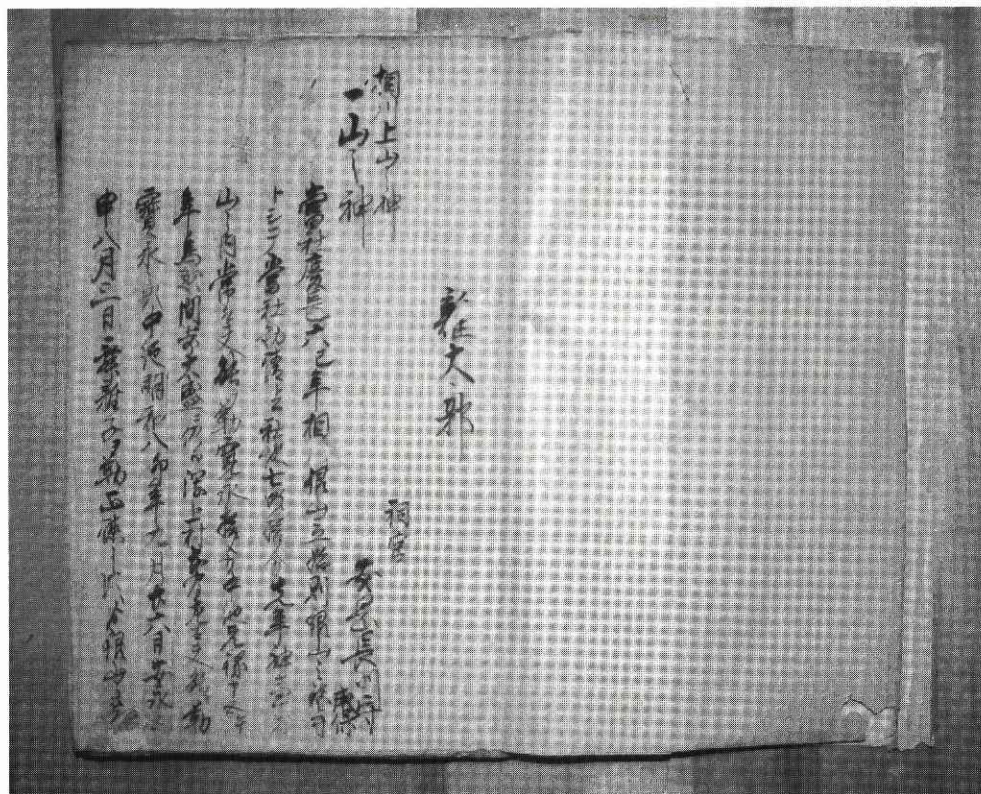
種	別	古文書
名	称	<small>しんこうじ むらけいちょう けんちちょう</small> 真光寺村慶長検地帳
指 定 年 月 日		昭和48年7月20日
所 在 地		佐和田町大字真光寺
所有者又は管理者		真光寺区・真光寺自治会長

検地帳は「お水帳」ともいわれ、年貢を決めるための重要な資料になるものでした。真光寺に伝わる検地帳は正式な名称を「佐州河原田ノ内真光寺村慶長御検地帳」といいます。佐渡では慶長の田地検地、元和の屋敷検地、元禄の田畑屋敷検地の3検地帳が存在しますが、慶長検地は佐渡で最初に行われた一国検地でした。慶長検地は、上杉景勝の代官河村彦左衛門尉吉久によって実施されたもので、検地帳には地字・ちあざ本刈高・ほんかりだか見出刈高・みだしかりだか百姓名が記されています。他の検地が石高（生産高）で表示されるのに対して、この検地は刈高で表されているのが特徴です。また、年貢は刈高100刈につき京榲^{ぎょうます}8斗4升（約152kg）とされました。

この検地が慶長5年（1600）に行われた理由として、慶長2年（1597）に土貢（年貢）^{どこう}の一律2割増が命ぜられて百姓の反対を受け、指出しを求める必要があったことが指摘できます。もっともこの検地は指出しによるもので実測ではなく、名請人も必ずしも実際の耕作者ではなかったようで、名目上の所有者が登録された場合もあり、耕作者を直接把握することを目的とした太閤^{たい}検地のねらいとはほど遠いものでした。また、この検地によって年貢が全免であった寺社領田は三ヶ一免^{ちゅうじめん えりようめん}となり、中使免や江料免などは廃止されています。このように、慶長検地帳は当時の佐渡の状況を示す史料として貴重なものです。



表紙



本文

(1) 町指定有形文化財

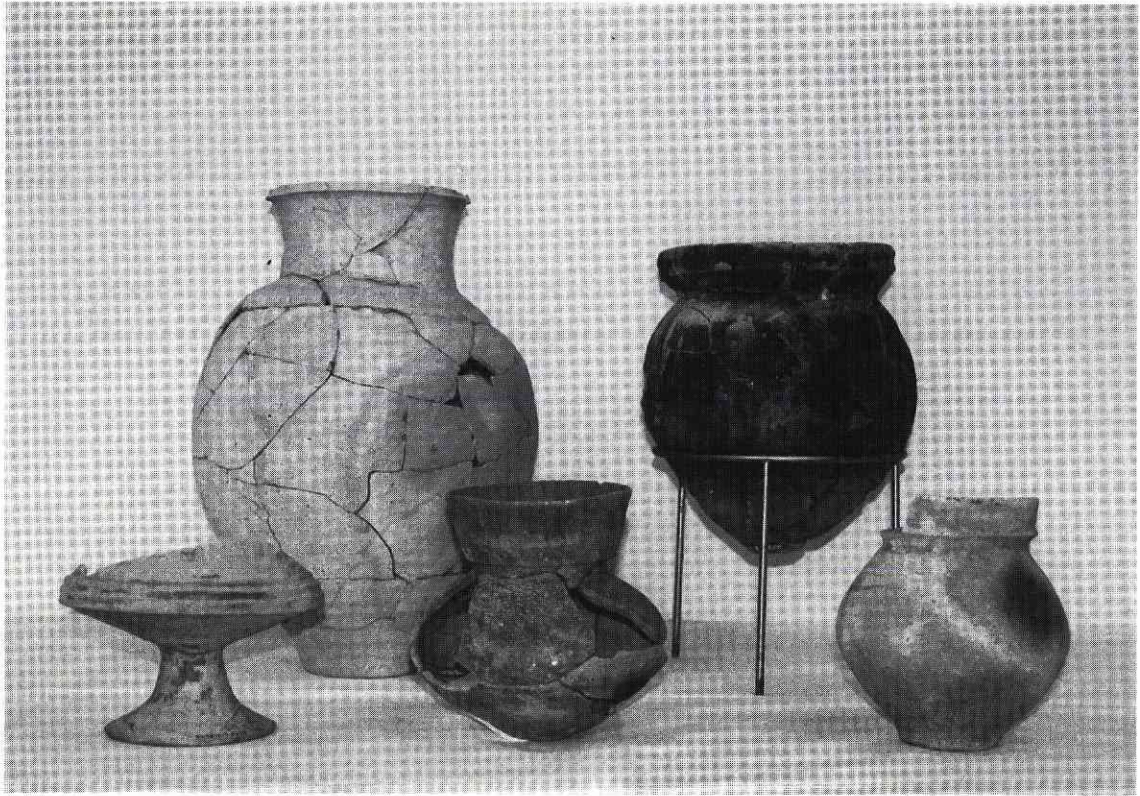
種	別	典籍
名	称	<small>さどこくじしゃちょう</small> 佐渡国寺社帳
指 定 年 月 日		平成15年5月12日
所 在 地		佐和田町大字沢根五十里1118番地
所有者又は管理者		田中友二

本書は佐渡国寺社帳と題して佐和田町沢根五十里の田中豊治家所蔵の古書で、正式な名称を『佐渡国寺社帳（宝暦度）巻下（社部）』と言います。

佐渡は天正期、慶長期と領主が替わるごとに検地が行われましたが、元禄期じょちじょまいの検地では事前に寺社の除地除米等を上申させています。元禄の寺社帳はそれを基に作られたものです。本書はその流れを汲むもので、度津神社宮司矢田求が当時の神職名等から宝暦年中（1751～1763）の書物であると断定して、昭和5年に本書を底本として、中興鈴木本、河原田金刺本を合わせて考証し、度津神社から出版されました。

本書は編集時、上中（寺の部）、下（社の部）の3巻から成っていましたが、上中巻は既に無く、下巻だけが田中本として現存しています。

これと同じく元禄寺社帳を基として作られたものに『佐渡国寺社境内案内帳（上中下）』3巻があります。この書は相川奉行所の寺社帳と云われ、佐渡国寺社帳とその最初に載る神社から廻り順等も同じであるので原本は同じものと思われますが、中巻は寛政9年（1796）の裏書きがあり、下巻は安永5年（1767）の記事が載っており、また佐渡年代記享和3年（1803）の条に「末年（寛政11年）御役所寺社帳焼失に付き村々出役所序境内間数等改の上新帳出来る」とあり、これ以降の写本です。



二宮加賀次郎遺跡

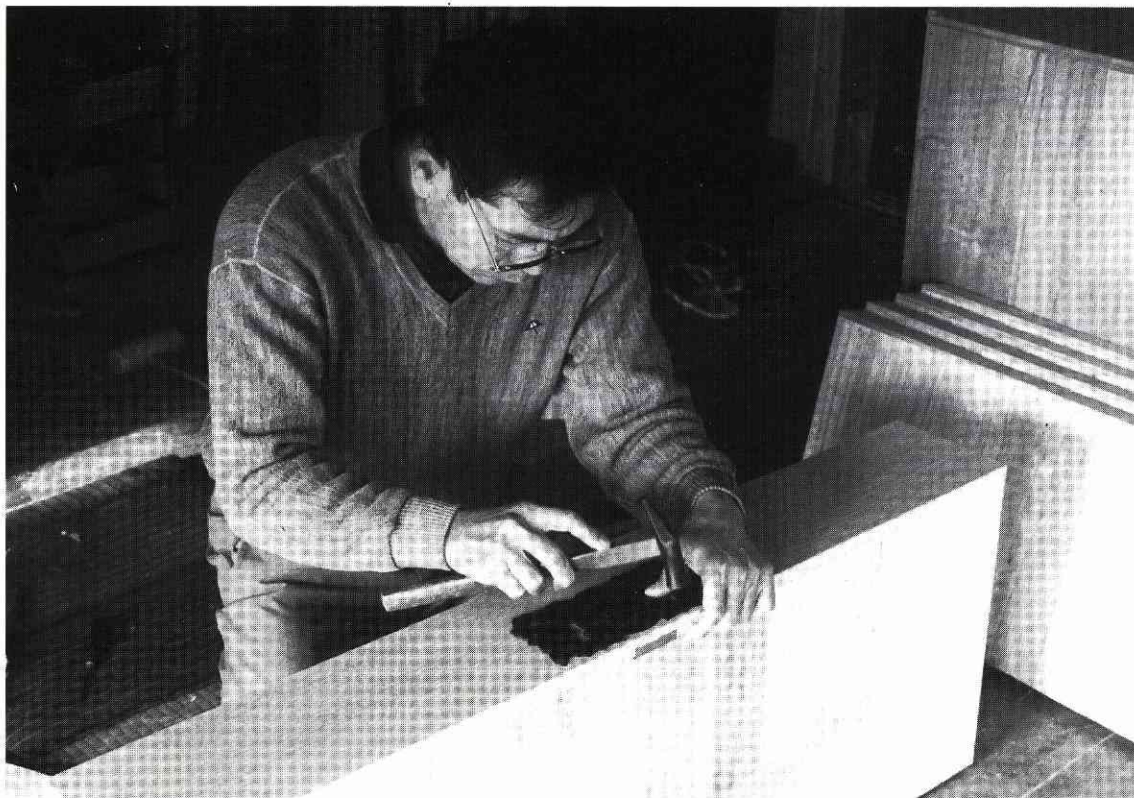
(1) 町指定有形文化財

種	別	考古資料
名	称	二宮加賀次郎遺跡出土遺物 <small>にくう か が じろう いせき しゅつど いぶつ</small>
指 定 年 月 日		平成15年9月9日
所 在 地		佐和田町大字河原田本町394番地
所有者又は管理者		佐和田町教育委員会

「加賀次郎」の名前は中世にこの地域の開墾を行った領主の名前と考えられ、それがそのまま字名となっています。昭和初期に石田川^{はざま}裕橋^{せき}下の六ヶ村堰からの用水路に遺物が流出していたことから発見されたと言われ、石田川左岸の二宮～石田地区に渡って存在するため、字名をとって二宮加賀次郎遺跡と呼ばれています。

二宮加賀次郎遺跡は、県道妙照寺佐和田線の道路改良工事に伴い、平成10年に佐和田町教育委員会によって発掘調査が実施されました。調査の結果、出土した遺物は、弥生時代～古墳時代にかけての土器や土師器^{はじき すえき}、須恵器などで、日常生活に使う煮沸用^{しゃふつ}、貯蔵用の土器（甕・壺・碗・蓋^{かめ つぼ わん ふた}）や供献用の土器（高杯^{たか}・器台^{つき}）などが出土しています。また、土錘^{どすい}（粘土製の網^{あみ}に付ける錘^{おもり}）などの土製品のほか、管玉^{くだだま}・勾玉^{まがたま}などの石製品や木製品など様々な種類の遺物が出土しています。出土した土器のなかには漆^{うるし}などが塗られた形跡のあるものがあり、祭祀に係る遺跡であったことがわかっています。

これらの遺物は佐渡における弥生時代から古墳時代の歴史をつなぐものとして、金井町の千種^{ちぐさ}遺跡に次ぐ貴重な資料といえます。

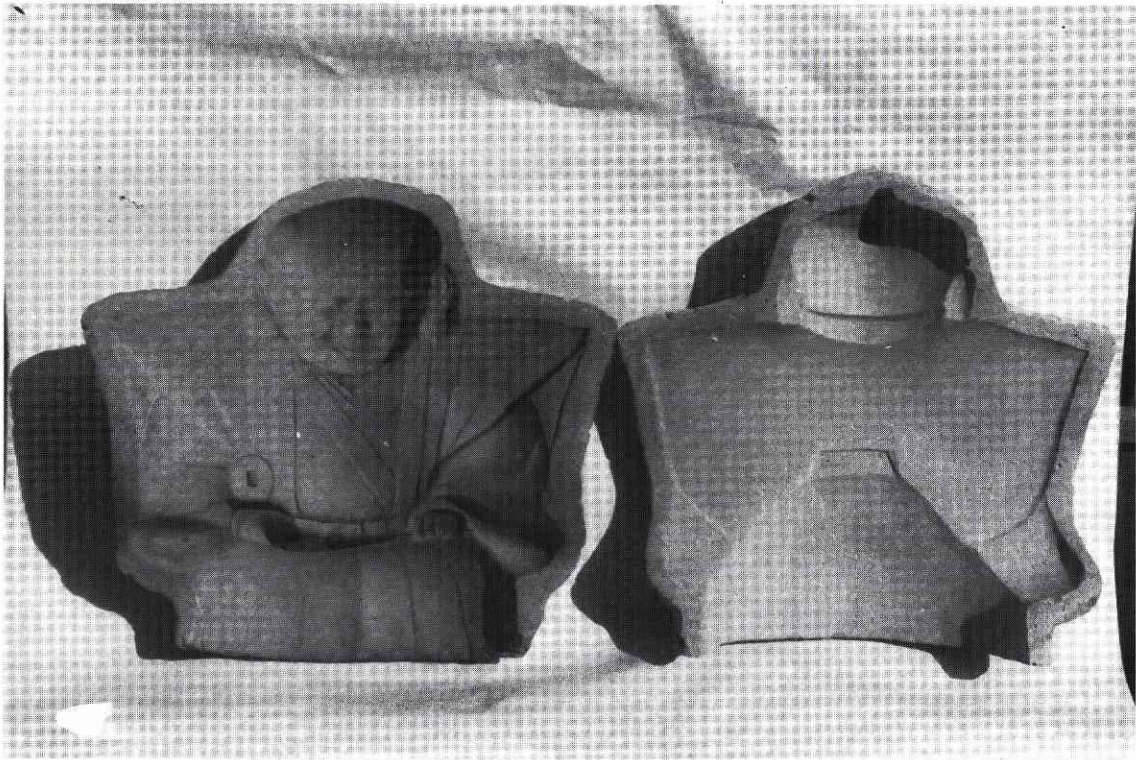


技術保持者 萩原 弘氏

(2) 町指定無形文化財

種	別	工芸技術
名	称	<small>やはた だんす せいぞうぎじゅつ</small> 八幡箆笥製造技術
指 定 年 月 日		平成9年10月4日
所 在 地		佐和田町大字八幡新町33番地 八幡2133番地2
技 術 保 持 者		萩原 弘、伊里栄一

やはただんす
八幡箆笥は小木町の船箆笥と並び、佐渡を代表する和箆笥で、大きな飾り金具が特徴です。八幡箆笥の創始は江戸時代といわれ、耕作地の少なかった八幡ではキリを植えて、冬場の農閑期に桐細工を行っていました。このような下地があつて、後に箆笥の一大生産地になったと考えられます。江戸時代に小木に箆笥の製作技法が伝わると、小木まで習いにでかけ八幡でも箆笥が作られるようになったと言われます。こうして作られ始めた八幡箆笥は、気候風土に適した整理具として、戦前はもとより昭和55年（1980）頃まで活況を呈し、一時は20人以上の箆笥職人が八幡に居ました。箆笥の製造には、地元産のキリ材を使い、板と板との接着には、めしのり飯糊（現在は木工ボンド）を使い、普通と違って鉄釘ではなく木釘を使用します。こうして作られる箆笥は外気の入らぬよう精巧に作られており、空の引出しを押すと上下の引出しが空気圧で飛び出します。しかし、合板製などの安価な箆笥が売られるようになると需用が減り、現在は2名の職人がその技術を伝えるのみとなりました。



八幡人形の型（福助）

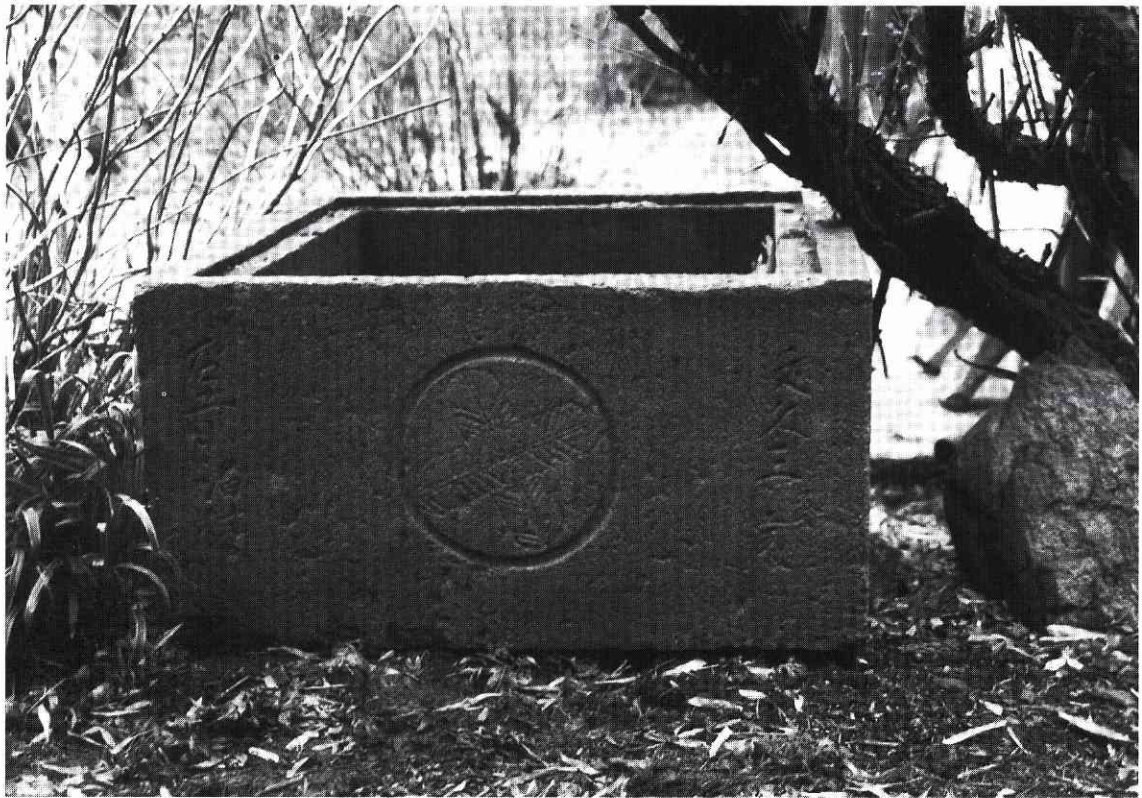


八幡人形（福助）

(3) 町指定有形民俗文化財

種	別	工芸品
名	称	<small>やはた にんぎょう かた</small> 八幡人形の型
指 定 年 月 日		昭和48年7月20日
所 在 地		佐和田町大字八幡新町13番地
所有者又は管理者		本間辰次郎

八幡人形は、むらおかぶんけい村岡文慶（多平）が染色を学ぶため京都を訪れた際に、伏見人形の魅力にみせられて、江戸時代末期の頃から京都の伏見系の土人形を佐渡で製作販売したことに始まります。このうち現在残っている104点の土製及び木製の型が町の文化財に指定されています。人形の製作は、まず前後の型にそれぞれ土を埋めこみ、平らになったところで型から抜き、これを合わせて一個の人形とします。これを素焼きにして着色したものが八幡人形です。佐渡における八幡人形は、ひな雛人形として親しまれたほか、福助・恵比寿・大黒などは縁起物として評判がよく、郷土玩具として広く島外へ売り出されました。創始者の村岡文慶は八幡新町18番地に住み、本職は染色業でしたが、瓦の製造や仏師や生花の師匠なども兼ねる多才な人物であり、八幡人形は瓦製造の余暇に同じ窯を使って焼いたと言われています。八幡人形の製作は六代目の本間辰次郎氏まで続きましたが、昭和7年（1932）に道路工事に伴って窯を取り壊して以来、八幡人形が作られることはなくなりました。



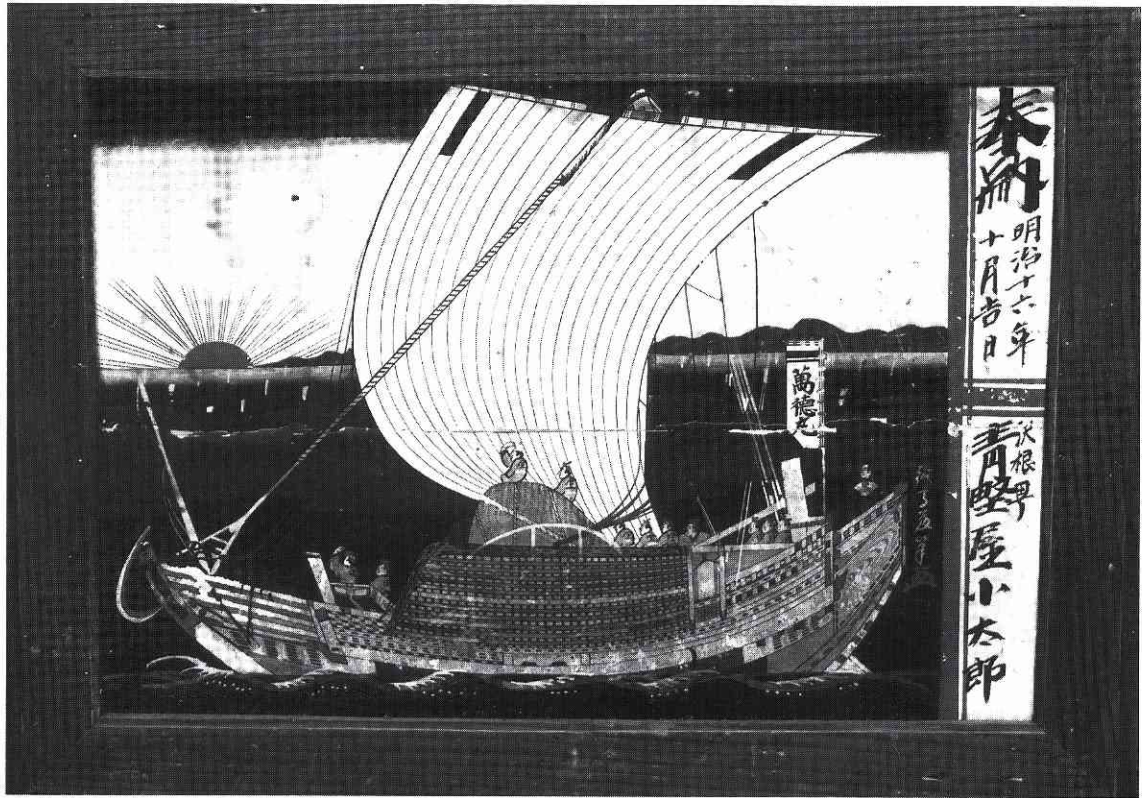
鈴木家の石風呂

(3) 町指定有形民俗文化財

種	別	彫刻
名	称	^{すずきけ} ^{いしぶろ} 鈴木家の石風呂
指 定 年 月 日		平成3年3月1日
所 在 地		佐和田町大字二宮658番地1
所有者又は管理者		鈴木忠敏

風呂の歴史は、木製の桶に沸かしたお湯を膝まで入れて半身浴をする蒸し風呂に始まり、当初はこの蒸し風呂が主流でした。慶長（1596～1614）末期には、首まで湯につかる据え風呂が始まり、これが現在の風呂の原形になったといわれています。このころの関西では、五右衛門風呂が主流でした。このほか、石を焼いて水を温める方法がありますが、これに使用されるものが石製の炊き風呂の浴槽でした。

鈴木家に伝わる石風呂の形は、立方体の一石で、内側を彫りこんだ浴槽です。外周は92cm、縦106cm、高さ49cm、内法は横71cm、縦84cm、深さ37cmで、上面の縁には、内側に幅6cm、深さ2cmに掘り下げてあり、^{うわぶた}上蓋が納まるようになっていますので、木製の^{ふた}蓋があったと思われます。底面の中央部には、直径約30cmの穴が開いており、ここに金属板をはめて下から火を炊く構造になっています。石材は石英安山岩で、佐渡羽茂町の小泊産です。浴槽前面には、「文久三（1863）癸亥 ^{たかのほ}丸に違い鷹羽（鈴木家の家紋） 石工 小泊村 勘左衛門」という刻銘があり、製作者、製作年代の分かる貴重なもので、佐渡において唯一確認されているものです。所有者の話によると、昭和27年（1952）頃まで使用されていたそうで、湯冷めが無く気持ちよかったそうですが、薪燃料が大変であったといえます。



船絵馬 万徳丸



武者絵馬 秀吉七武将図

(3) 町指定有形民俗文化財

種	別	絵画
名	称	<small>しらやま じんじゃ え ま</small> 白山神社絵馬
指 定 年 月 日		昭和48年7月20日
所 在 地		佐和田町大字沢根村595番地
所有者又は管理者		白山神社（宮司 矢田有年）

祈願のために神社に絵馬を奉納する風習は古くから日本の各地で行われてきました。絵馬の起源については諸説があり、最初は馬を神に奉納したものが、のちに馬の絵に代えられたものとされていますが、馬以外の絵を描いたものも少なくありません。白山神社の場合は船絵馬が多く、海上安全を祈った港町の庶民の生活がうかがわれます。このような絵馬は、武者絵馬などを合わせて白山神社に29点あります。白山神社に納められた絵馬は、沢根港に出入りした船主、船頭が、航海の安全を祈って奉納したものが多いです。絵馬は板絵で、泥絵具を使い、色彩鮮やかに描かれています。額絵馬とよばれる大型のものは、縦77cm、横177cmで、最も多いものは縦31cm、横44cmの大きさのものです。前者には、著名な画家の筆によるものがあり、作者名が書かれています。その中では、「奉納者相川柴町三河屋七兵衛、安政四（1857）巳十一月」が一番古いようです。また、寺泊港の白山媛神社に奉納されているものと同一のものがあり、これは当町の青木栄作氏が奉納されたものと思われます。



鬼 太 鼓



神 輿 渡 御

(4) 町指定無形民俗文化財

種 別	民俗芸能
名 称	<small>きんぼくさん じんじゃ れいさい しんじ</small> 金北山神社例祭神事
指 定 年 月 日	平成15年5月12日
所 在 地	佐和田町大字沢根五十里758番地
保 持 団 体	金北山神社（宮司 矢田有年）

西野の金北山神社は社伝によれば神亀元年（724）の創建と言われ、寛永年中に仕出喜間歩（鶴子銀山）で大盛りを得た山師秋田権左（右とも）衛門によって祭礼が行われたのが最初とされています。

神輿は台座が方約1.9mの16人担ぎで、重さが約800kgあり、正面に「金銀山」、裏面に「大盛」の金文字が入ります。

鬼太鼓は相川町の善知鳥神社より伝わった相川流と呼ばれるもので、鬼のほか豆蔲の翁が加わっているのが特徴で、当社に伝わる舞は、最も古い形式を残していると言われています。

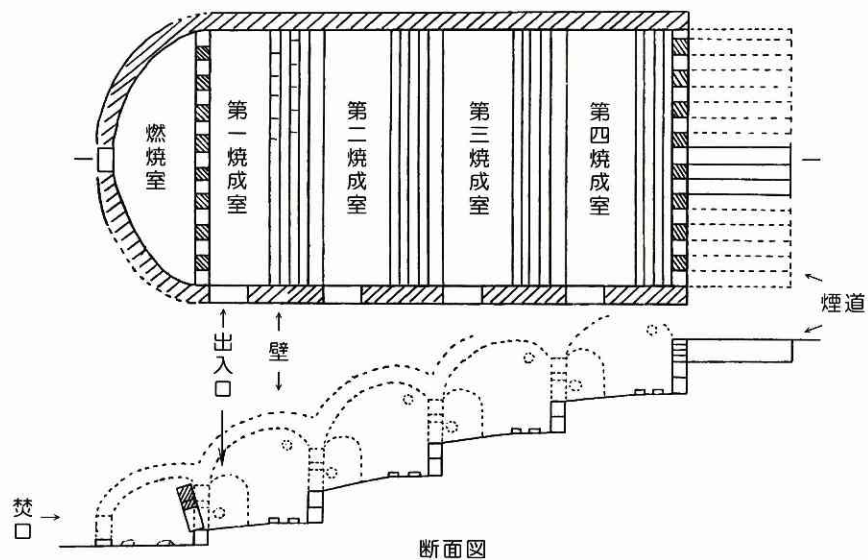
例祭当日に関係者は社殿に集合し、宮司の修祓を受けた後、獅子舞を奉納して鬼太鼓が始まります。約1時間の豆蔲の舞が終ると、先頭の赤鬼が神社の鳥居に張ってある注連縄を長刀で切って、神輿渡御の行列が神社を出て行きます。神輿渡御は猿田彦を先頭に下り囃子、神輿が続き、炭屋町の東端から田中町の漁港入口まで担ぎます。

西野金北山神社の例祭は、以前は五十里祭と称して現在の西野、炭屋町、城の下、氏子の他に東野、田中町、籠町（東半分）を含めた旧五十里地区の大祭で、9月20日に執り行われましたが、終戦後国仲合同祭のため4月15日に変更されて現在も続けられています。



小 沢 窯 跡

平面図



断面図

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

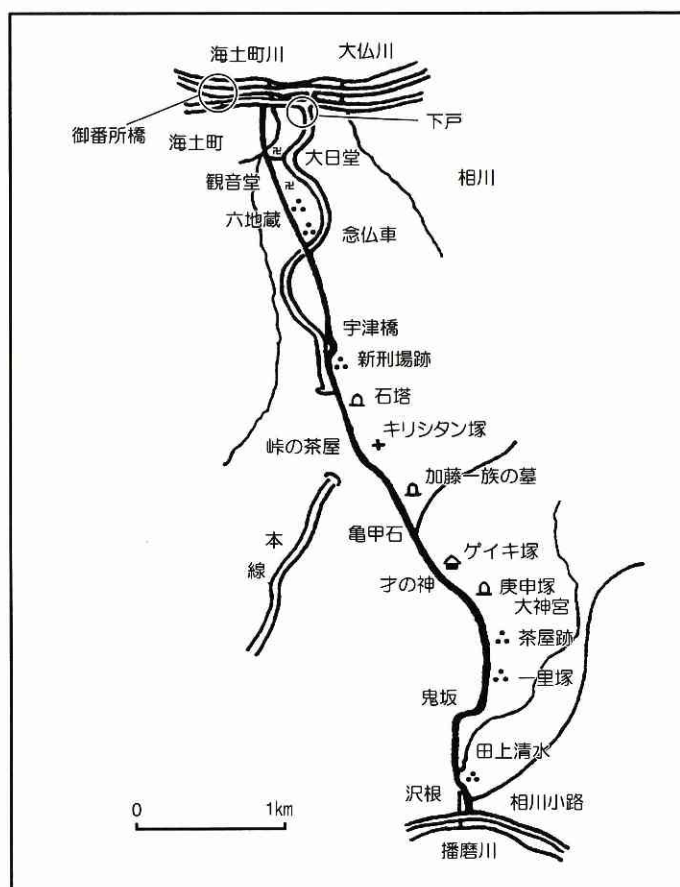
種	別	史跡
名	称	<small>こざわがま あと</small> 小沢窯跡
指 定 年 月 日	昭和50年12月10日	
所 在 地	佐和田町大字窪田70番地6	
所有者又は管理者	佐和田町	

国道350号線から佐和田中学校へ向かい、交通公園へ入ると「焼場跡」と呼ばれるわずかな雑木林があります。この一帯は「小沢」または「小沢新開」とも呼ばれ、そのなかに小沢窯跡があります。昭和44年（1969）8月に実施された佐和田町教育委員会による発掘調査の結果、4つの焼成室をもつ登窯が発見され、このとき「島製」、「霞瘡園」の刻印のついた破片が出土しました。この刻印は、やじまかずえ矢島主計の別号（しましやうふ島樵夫、かこえん霞瘡園）であり、このことから窯主が彼であったことが明らかとなっています。小沢窯の起こりについては残念ながら明確にできませんが、『佐渡四民風俗』では、文化年間（1804～1817）の中期か末期であろうとしています。

矢島主計は開墾に力を入れ、米沢出身の三太夫という開墾師を招いて多くの耕地を開きましたが、この三太夫が瓦焼きの技術をもっていたので、小沢に窯を築き、瓦や植木鉢、土鍋、徳利、すりばち搦鉢、つぼ壺などの生活雑器を焼かせたといえます。幕末から明治にかけて、窪田には瓦やレンガを焼く職人が4～5人いましたが、これらの人々は、小沢窯などで働いた人の流れを汲むものであると考えられます。小沢窯は天保3年（1832）に矢島主計が亡くなってからしばらくして閉鎖されましたが、この窯は寛政12年（1800）に、相川の黒澤金太郎によって始められた「金太郎焼」とともに、地方窯の系譜、佐渡の焼物の研究史上重要な資料といえます。



中山旧街道



(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	史跡
名	称	<small>なかやま きゅうかいどう</small> 中山旧街道
指 定 年 月 日		昭和50年12月10日
所 在 地		佐和田町大字沢根村2353番地～2529番地
所有者又は管理者		佐和田町

隆盛を誇った佐渡金銀山は、寛永期に入ると産出量が減り、次第に衰退していきました。このため、相川は鉱山町としてよりも佐渡国を統治するための中心地としての色合いを濃くしていきました。この頃、町の中心地は奉行所の建設とあいまって、台地上の上相川から下町に移り、整備開発の重点もまた下町に集中していきます。一丁目から四丁目を埋め立てて、ほぼ今の相川町原形ができたのは、この頃といわれています。時を同じくして、交通網も険しい山越えの道から平坦な道が求められ、寛永5年（1628）に中山街道が開通したと考えられています。その後、明治18年（1885）に堀割新道ほりわりができるまでの間、この街道は国仲から相川間を結ぶ幹線道路として大いに利用され、佐渡に赴任した奉行や水替人足など多くの人々が歩いて行きました。今は佐和田町の史跡遊歩道となり、散歩道として四季を通じて趣はつきません。（なお、相川側の中山旧街道も相川町の指定を受けています。）



一里塚遠景



一里塚

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	史跡
名	称	<small>なかやま いちりづか</small> 中山の一里塚
指 定 年 月 日	昭和50年12月10日	
所 在 地	佐和田町大字沢根村292番地、415番地	
所有者又は管理者	本間縣治ほか	

佐渡の一里塚は、承応2年（1653）から明暦元年（1655）にかけて造られたものといわれています。当時、羽田町（相川）札の辻より、中山峠～窪田～八幡辰巳～豊田～大小～西三川～小泊～村山～小木と佐渡の幹線道路ともいふべきこの街道には、修築されたものを含めて17ヵ所もあったといわれています。このうち現存しているものは、中山・辰巳（佐和田町）、豊田・大須（真野町）、小泊・村山（羽茂町）、小木（小木町）の7ヵ所です。

中山の一里塚の形状は、小高く盛土された塚で、長径約4m、高さは約1.5mです。一里塚は街道の両側に築かれ、松や榎が植えられて目印とされました。現在では、部落の人達が東側の塚の祠の前で花と団子を供えて、念仏を唱えて、ささやかな酒宴を開いています。



遠 景

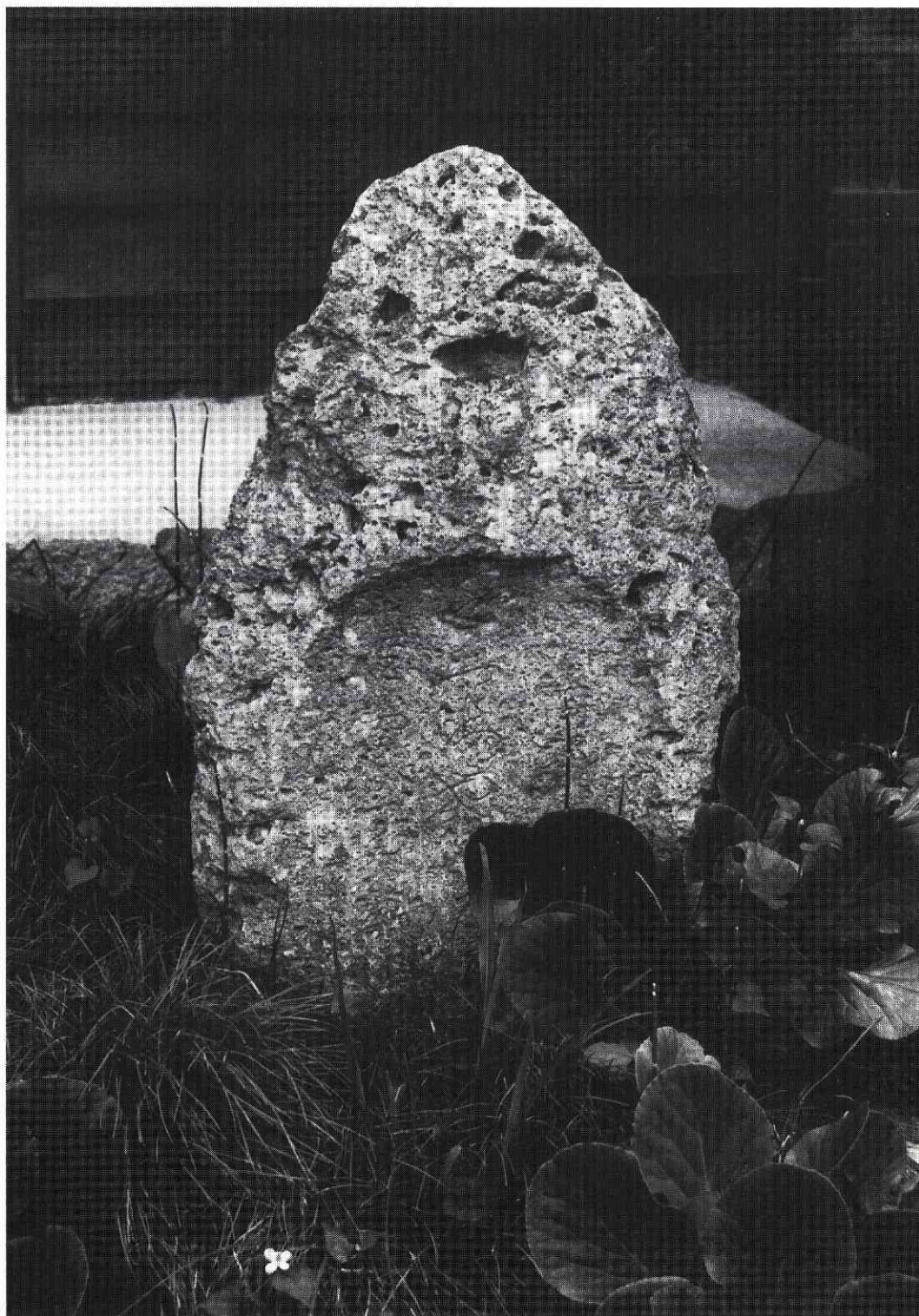


八 幡 砂 垣

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	史跡
名	称	<small>やはた すながき</small> 八幡砂垣
指 定 年 月 日	昭和51年3月29日	
所 在 地	佐和田町大字八幡2011番地ほか13筆	
所有者又は管理者	哥 伸ほか	

昔、八幡から八幡新町にいたる一帯は荒れ果てた砂原で、風のはげしい時は、遠く泉村（金井町）まで砂が飛び、農作物に被害を与えたといわれています。このため、寛永20年（1643）に奉行所は「砂垣」を作り、松を植えてその対策としました。古い文献によると、長さ12町（約1,308m）、幅78間（約142m）を単位として「柴垣」を組み、その中に砂を詰めて小松を植えたとあります。この作業の人夫は、被害の多い三宮、竹田、大川、国分寺、長石、四日町、八幡など12の村から出され、一人あたりの給与は1日につき米5合と書かれています。また民衆に伝えられてきた歌「八幡砂垣三年廻り 今年はゆい年ゆわれ年」に謡うたわれたように、3年目ごとに柴垣を結び替え、松の補植が行われました。そして監視のために「砂垣同心」が置かれたといえます。砂垣が大きくなり、松も生長した元文元年（1736）、山田村の太郎右衛門は、後山村の与三兵衛ら7人と奉行所に願い出て砂丘を開発し、翌年には辰巳村が誕生しました。村名は、元文元年は辰年、翌2年は巳年であることに由来します。



芭蕉荒海の句碑

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	史跡
名	称	<small>ばしょう あらうみ く ひ</small> 芭蕉荒海の句碑
指 定 年 月 日	昭和51年3月29日	
所 在 地	佐和田町大字沢根竈町23番地1	
所有者又は管理者	総鏡寺（住職 中村泰裕）	

荒海の句「荒海や佐渡によこたふ天の川」は、元禄2年（1689）に松尾芭蕉まつお ばしょうが、越後国出雲崎の浜から遥かに佐渡を望んで詠んだ句です。総鏡寺の境内にはこの句碑が建立されており、対岸の出雲崎にも同様の句碑があります。この場所は真野の入江が一望の下に眺められる場所で、晴れた日には、遠く越後の山々が眺められる風光明媚ふうこうめいびな場所です。句碑の建立された当時、佐渡の俳諧は天和年中（1681～83）に越後の巻淵為兼という人物が広めたといわれ、その後有名な俳人が次々と島を訪れて、次第に佐渡の俳諧が盛んになりました。時あたかも寛政10年（1798）は芭蕉没後約百年にあたったので、それを記念してこの句碑を建てることになったと思われます。願主の「佐渡一静」は矢島主計やしまかづえの俳号です。このほか、佐渡にある荒海の句碑は、明治時代に建てられたものが、羽茂町上山田の気比神社境内と金井町北条家墓地にあります。



眞光寺本坊跡



薬師如来坐像



勝軍地藏

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	史跡
名	称	<small>きんぼくさん じょうじゅいん しんこうじ あと</small> 金北山成就院真光寺跡
指 定 年 月 日		昭和60年2月23日
所 在 地		佐和田町大字真光寺824番地2ほか
所有者又は管理者		金北山神社里社、金光家、円照寺、真田寺

真光寺はもともと修験系の寺院が前身といわれ、当初は清水野の北、本坊沢の地にあったといわれます。天正17年（1589）、上杉景勝が佐渡を領土としたときに、真言宗の真光寺を金北山神社の別当寺としました。真光寺は寺領30町9反5畝（約30.68ha）、石高54石（8,100kg）、寺家8カ寺（東之坊、下之坊、円満坊、田中坊、上之坊、南之坊、坂本坊、脇之坊）と末寺門徒18カ寺を有し、こびえさん れんげぶじ小比叡山蓮華峰寺めいさつに次ぐ名刹でした。

慶長16年（1611）佐渡代官大久保石見守長安の発願により、仁王門を建立、続いて元和元年（1615）に武田家の遺臣であった川崎四郎左衛門元邦の孫中山元忠、方恭が山門を建立寄進し、さらに阿弥陀堂を再建して、山容は隆盛を極めました。

真光寺は今、字名として残されていますが、本坊をはじめ寺家八坊は、明治元年（1868）の神仏分離令が出された際に、別当であった賢理が願い出て神職となったことで、初代快清より279年間続いた山容はことごとく姿を消しました。しかし、金北山神社里社や本坊のあった金光家、後に再興した円満坊（現円照寺）、田中坊（現真田寺）では、これらの遺品の一部を保有し、真光寺本坊を中心とした寺家八坊の数々の往時を物語っています。



三 光 の 杉

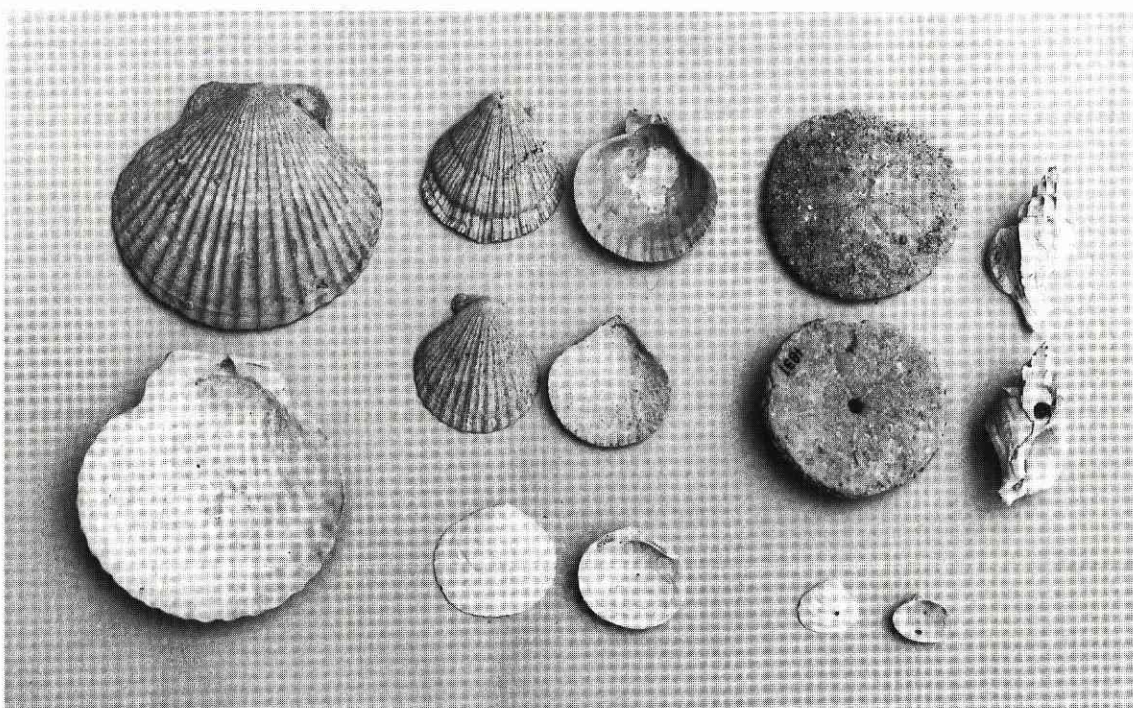
(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	天然記念物
名	称	<small>さんこう</small> 三光 <small>すぎ</small> の杉
指 定 年 月 日		昭和48年10月1日
所 在 地		佐和田町大字市野沢856番地
所有者又は管理者		実相寺（住職 佐渡友恵隆）

三光の杉は、根回り11.9m、目どおり6.47m、樹高30m、枝下15m、枝張南北22m、東西19.8m、樹齢およそ1,000年といわれます。この杉は文永9年（1272）4月7日に一の谷（現妙照寺）に移された日蓮上人が、天気のよい日には必ずこの杉のある丘陵へ行き、朝日を拝み念仏を唱えたと伝えられる場所にあり、上人ゆかりの霊木として知られています。また、日蓮上人が光日坊という人にあてた御書に、「ぼんてん 梵天、たいしゃく 帝釈、日月、四天はどうなされたか。天照大神、正八幡はこの国におられぬのであろうか。鎌倉へ帰ることも、父母の墓へ参ることも叶わぬか。と高い山に登って叫んだところ、頭の白い鳥が飛んで来た。この吉瑞のあと文永11年（1274）3月8日赦免状が佐渡の国についた」と書かれています。実相寺の伝説によれば、文中の高い山とは実相寺の境内のことで、白い鳥のとまったのが三光の杉であるといわれています。この大杉に「日月星」と鳴く鳥がしばしば飛来したので「三光の杉」と命名されたといえます。



貝立遠景



產出化石

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	天然記念物
名	称	<small>さわ ね そう かいだて</small> 沢根層貝立
指 定 年 月 日		昭和51年3月29日
所 在 地		佐和田町大字沢根村字鶴子
所有者又は管理者		五十里財産区・佐和田町

沢根の貝立の貝化石産地は、沢根層の地層で、昭和48年（1973）歌代勤などにより下部を分離し、「貝立層」と命名されました。貝立は、玄道川の上流右岸の崖で、厚さ約40mの中粒砂の砂礫層^{されき}で、化石床が発達しています。上流では、下位の中山層と不整合関係になっているのが観察できます。貝立の産出化石については榎木次郎、黒田徳米、菊池勘左衛門、歌代勤など多くの人々によって研究されています。沢根層の産出化石は、軟体動物・擬軟体動物^{なんたい ぎ なんたい}184種で、その主なものは、ホタテガイ、コシバニシキ、エゾタマキガイ、アラスカシラオガイ、カシパンウニ、ツノオリイレガイで、ほかにもアズマニシキガイ、エゾキンチャクガイ、エゾシラオガイ、ベニグリガイ、ユキノカサガイ、エゾイガイ、ナミマガシワガイモドキ、マツヤマワスレガイ等の寒・浅海棲種^{せんかいせいしゅ}であって、深海棲種^{しんかいせいしゅ}を混在しない点が特徴です。



タブノキ群落

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	天然記念物
名	称	タブノキ ^{ぐんらく} 群落
指 定 年 月 日	昭和60年2月23日	
所 在 地	佐和田町大字石田566番地ほか3筆	
所有者又は管理者	新潟県・新潟県立佐渡高等学校	

県立佐渡高校敷地の南側、北西から南東方向へつづく急斜面(3,509㎡)には、タブノキを主とする自然林があります。この斜面は、第四紀国仲層の粘土・砂利、第三紀中山層の黒色泥岩、及びその崖錐性堆積物^{がいすいせい}から成っており、海岸から約900m内陸に入った場所にあります。タブノキは、暖流の洗う海岸地帯に好んで生育する常緑照葉の樹高13mにもなる高木です。ここにあるタブノキは、腰高最大幹廻り210cmで、20cm以上のものが122本、20cm未満のものが98本、合計220本の大群落です。この自然林には、タブノキのほか、ヤブツバキ、シロダモ、モチノキなどの常緑樹や林床にはイノデ、ヒサカキ、オモト、ヒメヤブラン、ヤツデ、マサキ、ヒメアオキなどの暖帯樹種が生育するほか、エノキ、ヤマザクラ、ヤマモミジ、ケヤキ、コナラ、ハリエンジュ、アカメガシワなどの落葉樹が混在しています。

この群落は、幹廻り20cm未満のタブノキが45%を占めていることから、群落^{せんい}が若く、遷移の途中相であることを意味しています。遷移が進めば、高木相はタブノキ、亜高木相はヤブツバキの優先する群落になると考えられます。ここを自然林として保護することは、タブノキと他の樹種との住み分けや交替がどのように行われるかを見ることのできる格好な資料となります。



沢根崖遠景

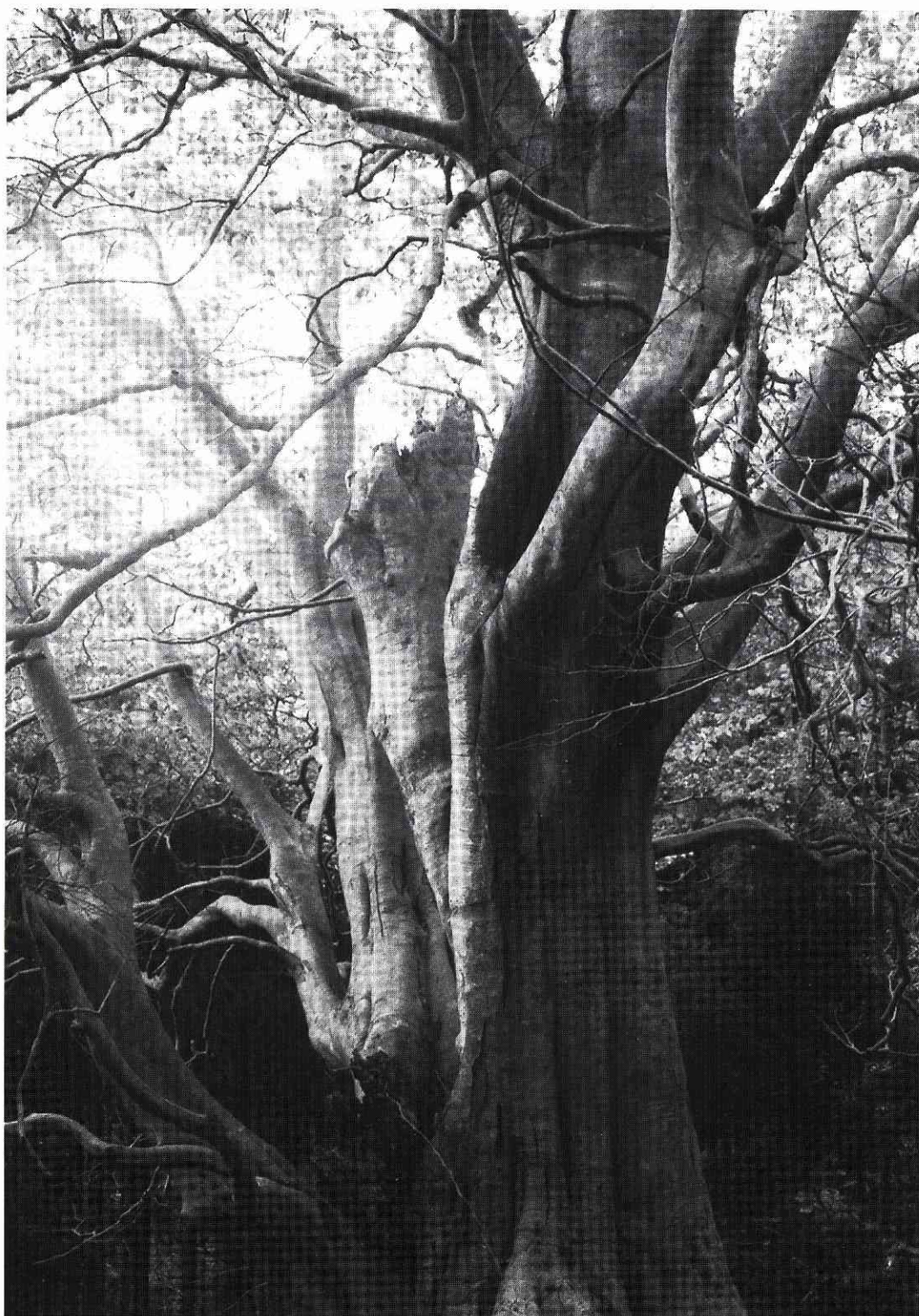
(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	天然記念物
名	称	沢根崖 <small>さわねがけ</small>
指 定 年 月 日	昭和60年2月23日	
所 在 地	佐和田町大字沢根村2129番地ほか34筆	
所有者又は管理者	渡部千厨子ほか18名	

佐和田町沢根質場から須川・羽二生を経て、相川町二見に至る約2kmの海岸線は、波の侵食しんしょくを受けた、通称「一番崖～四番崖」の急崖が連続して見られます。ここは昔から近くの貝立地域かいだてとともに、貝類化石の多産地として全国的に知られ、多くの研究者が調査に訪れた場所です。近年は貝類化石のほかに有孔虫化石ゆうこうちゅう化石・珪藻化石けいそう化石・珪質鞭毛虫類化石けいしつべんもうちゅうるい化石の研究がなされており、多くの論文が発表されています。

沢根の崖を成している地層は、研究が進むにつれて、その層序が何度か書き替えられてきました。初めは鶴子の貝立と河内付近を含めて、鮮新世せんしんせいの沢根層として一括されてきましたが、昭和40年代に沢根層の下部を河内層、中部を貝立層かいだて、上部を質場層しちばと命名されて現在に至っています。この崖は鮮新世最上部の質場層に位置づけられ、模式地とされています。

質場層は化石の研究から、陸に近い浅い海に堆積した地層で、寒冷な海流に洗われ、陸水の影響や時には暖流の影響により、内湾に移行するような環境下で形成されたことが考えられます。このように、ここは化石の産地として学術的に貴重であるばかりでなく、同一の地層を2kmも追跡できることから、地層の堆積の仕組みを研究する上でも貴重な場所として注目されています。



真光寺のブナ

(5) 町指定史跡名勝天然記念物

種	別	天然記念物
名	称	^{しんこうじ} 真光寺のブナ
指 定 年 月 日		平成11年11月9日
所 在 地		佐和田町大字真光寺字上手1769番地1
所有者又は管理者		二宮財産区・佐和田町

ブナ科の落葉高木であるブナは、大きなものになると高さ30m、径1.7mにもなり、日本の山の原植生はブナ林であるといわれます。佐渡のブナは海拔600～700mから出現し、900～1,000mで純林を形成します。しかし、その分布は大佐渡山脈に限られ、林野面積6,100haのうち、ブナ林の面積は約40ha（0.07％）と絶滅寸前の状態といえます。これは杉などの植林に伴い、ブナ林が伐採されたためで、大きなブナの木は運び出す手間を考えてそのまま残されたと考えられます。真光寺に残るこの巨木もそうして生き残ったものであると考えられます。この巨木は、樹高20m、幹廻り5.4m、樹冠幅18.5mを測りますが、とくに幹廻りは、秋田県和賀山塊^{わ がさんかい}のブナ（8.6m）、同（8.1m）、静岡県^{かんなみ}の函南原生林のブナ（6.4m）、大阪府和泉葛城山^{いずみ かつらぎさん}ブナ林（5.6m）、山形県セナ沢のブナ（5.5m）に次ぐ、日本第6位の大きさを誇ります。仏峠のそばにあったことから峠を通る人々から「仏峠のブナの木」と呼ばれました。

IV. 指定文化財一覽表

I. 国指定文化財

種 別	名 称	員数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	所在番号
-----	-----	----	-------	-------	---------	------

(1) 重要無形民俗文化財

民俗芸能	佐渡の人形芝居		昭52. 5. 17	両津市・佐渡郡	佐渡人形芝居保存会	1
------	---------	--	------------	---------	-----------	---

II. 県指定文化財

種 別	名 称	員数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	所在番号
-----	-----	----	-------	-------	---------	------

(1) 有形文化財

絵 画	翁・三番叟絵扁額 三十六歌仙絵扁額	2 18	平 6. 3. 29	市野沢	実相寺	2
-----	----------------------	---------	------------	-----	-----	---

(2) 無形文化財

工芸技術	佐渡の蛸型鍍金技術		昭53. 12. 26	佐和田町	佐渡蛸型鍍金技術 保存振興会	3
------	-----------	--	-------------	------	-------------------	---

(3) 史跡名勝天然記念物

天然記念物	乙和池の浮島及び植物群落		昭38. 3. 22	山田	長福寺・佐和田町	4
-------	--------------	--	------------	----	----------	---

(4) 選定保存技術・保持者

工芸技術	佐渡茅葺職人	3	平12. 3. 24	佐和田町	中川若松ほか2名	5
------	--------	---	------------	------	----------	---

II. 県指定文化財

種 別	名 称	員数	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	所在番号
-----	-----	----	-------	-------	---------	------

(1) 有形文化財

建造物	励風館	1	昭48. 7. 20	沢根五十里	三井あき子・金子達彌	6
建造物	沢根竈町の善宝寺	1	昭51. 3. 29	沢根竈町	総鏡寺	7
建造物	二宮神社能舞台	1	平15. 9. 9	二宮	二宮神社	8
建造物	白山神社能舞台	1	平15. 9. 9	山田	白山神社	9
建造物	八幡若宮神社能舞台	1	平15. 9. 9	下長木	八幡若宮神社	10
彫 刻	木食行道作大黒天	1	昭48. 11. 20	八幡	山中武久・佐渡博物館	11
彫 刻	木食行道作子育地藏	1	昭48. 11. 20	真光寺	円照寺	12
彫 刻	二宮神社狛犬	2	平 3. 3. 1	二宮	二宮神社	13
彫 刻	実相寺仁王像	2	平11. 11. 9	市野沢	実相寺	14
絵 画	妙照寺涅槃図	1	平12. 9. 27	市野沢	妙照寺	15
絵 画	洛中洛外図屏風	1	平13. 7. 11	市野沢	妙照寺	16
絵 画	普門品註画	9	平15. 5. 12	市野沢	実相寺	17
絵 画	金剛界・胎藏界両部曼荼羅図	2	平15. 9. 9	沢根村	曼荼羅寺	18
古文書	真光寺村慶長検地帳	1	昭48. 7. 20	真光寺	真光寺自治会長	19
典 籍	佐渡国寺社帳	1	平15. 5. 12	沢根五十里	田中友二	20
考古資料	二宮加賀次郎遺跡出土遺物		平15. 9. 9		佐和田町教育委員会	21

種 別	名 称	数量	指定年月日	所 在 地	所有者・管理者	所在番号
-----	-----	----	-------	-------	---------	------

(2) 無形文化財

工芸技術	八幡箆笥製造技術	2	平 9. 10. 4	八幡新町、八幡	萩原弘、伊里栄一	22
------	----------	---	------------	---------	----------	----

(3) 有形民俗文化財

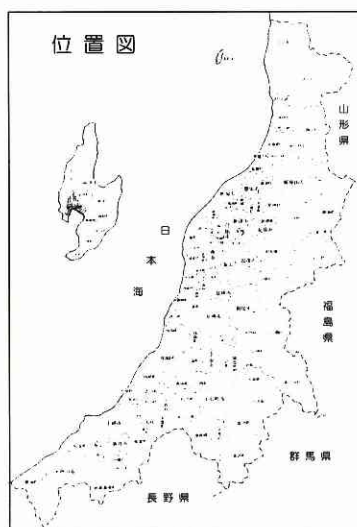
工芸品	八幡人形の型	108	昭48. 7. 20	八幡新町	本間辰次郎	23
彫 刻	鈴木家の石風呂	1	平 3. 3. 1	二宮	鈴木忠敏	24
絵 画	白山神社絵馬	29	昭48. 7. 20	沢根村	白山神社	25

(4) 無形民俗文化財

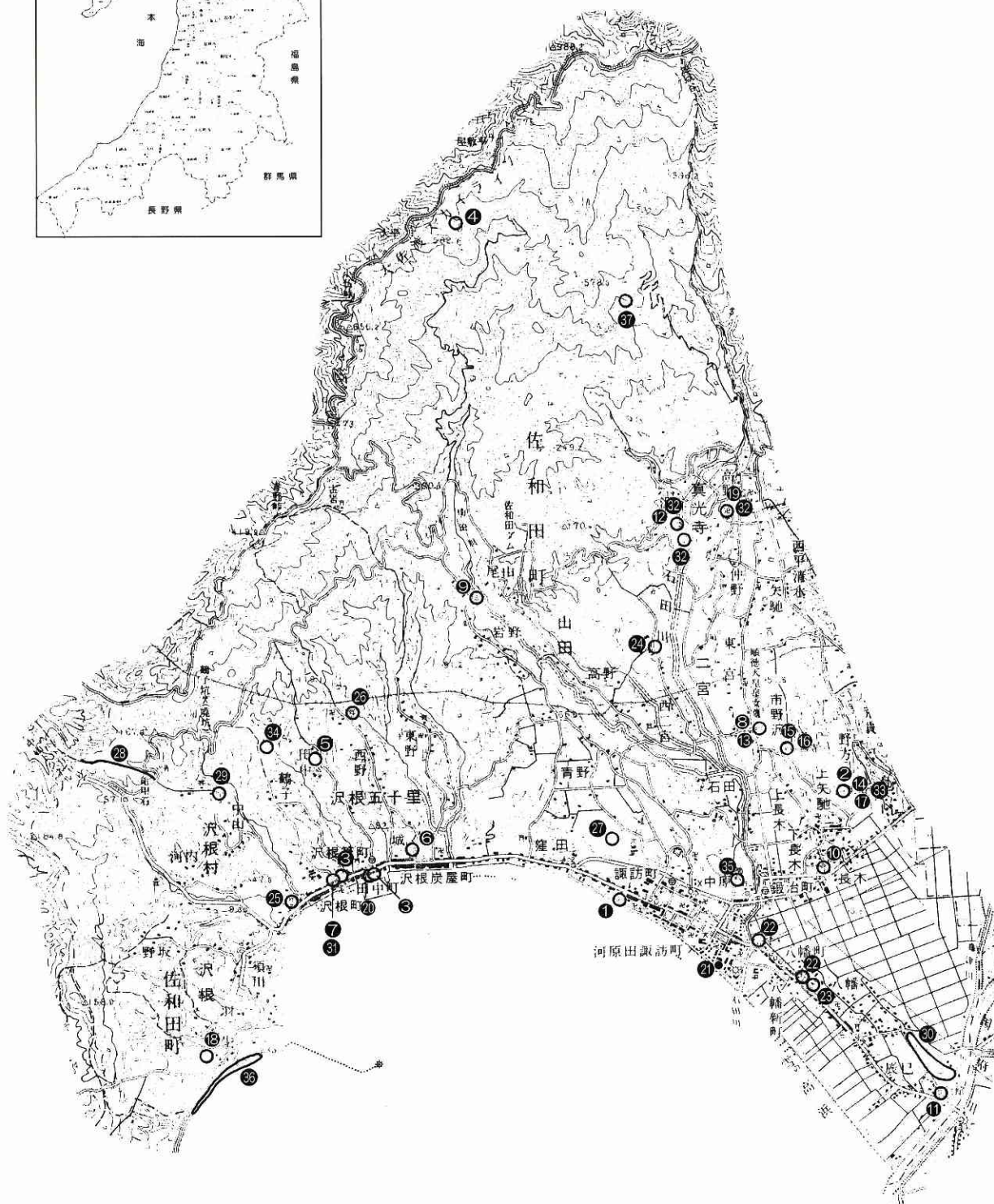
民俗芸能	西野金北山神社例祭神事		平15. 5. 12	沢根五十里	金北山神社	26
------	-------------	--	------------	-------	-------	----

(5) 史跡名勝天然記念物

史 跡	小沢窯跡		昭50. 12. 10	窪田	佐和田町	27
史 跡	中山旧街道		昭50. 12. 10	沢根村	佐和田町	28
史 跡	中山の一里塚		昭50. 12. 10	沢根村	本間縣治ほか	29
史 跡	八幡砂垣		昭51. 3. 29	八幡	哥伸ほか	30
史 跡	芭蕉荒海の句碑		昭51. 3. 29	沢根籠町	総鏡寺	31
史 跡	金北山成就院真光寺跡		昭60. 2. 23	真光寺	金北山神社ほか	32
天然記念物	三光の杉		昭48. 10. 1	市野沢	実相寺	33
天然記念物	沢根層貝立		昭51. 3. 29	沢根村	五十里財産区・佐和田町	34
天然記念物	タブノキ群落		昭60. 2. 23	石田	新潟県・県立佐渡高校	35
天然記念物	沢根崖		昭60. 2. 23	沢根村	渡部千厨子ほか	36
天然記念物	真光寺ブナ		平11. 11. 9	真光寺	二宮財産区・佐和田町	37



佐和田町文化財位置図



あ　と　が　き

このたび、佐和田町文化財（平成15年度版）を上梓しました。この冊子には文化財保護法に示されている有形文化財、無形文化財、民俗文化財、天然記念物などのうち、指定を受けた町内のもの全てが網羅されており、前回の「平成6年度版」発刊以後に、新しく指定された物件14件も含まれています。また、中には八幡地区にあった「順徳院御腰掛の松」のように松喰い虫の被害を受けて枯死し、町文化財の指定を解除されたものもあります。

昭和42年に佐和田町文化財保護審議委員会が発足して以来、歴代の委員各位が、鋭意佐和田町に現存する文化財の保護、未来への保存、伝達に努めて参りました。歴代の委員各位の中には文化財のルーツを尋ねて、東京、京都と碩学の門を敲き、一層の正鵠を得るよう努められた方々も多数おいででした。これら先任の方々に深く敬意を表すると共に、先任の委員の方々の多くが、今日幽明界を異にしており、これらの方々に対して謹んでご冥福をお祈りします。

また、文化財の保護は、委員各位の努力だけでなく、教育、経済、行政のあらゆる面で活躍されている町民の皆様の努力があつてより発展向上すると思います。町民の皆様にこの冊子をお届けすることが出来たことを無上の喜びとするものです。

平成16年2月

佐和田町文化財保護審議会
会長 本 間 邦 彦

平成15年度文化財保護審議委員

会 長 本 間 邦 彦

職務代理 菊 地 初 雄

委 員 大 滝 清 一

委 員 加 藤 長 三

〃 上 林 章 造

〃 矢 田 有 年

（敬称略 五十音順）

佐和田町の文化財

－平成15年度改訂版－

平成16年2月1日

編集 佐和田町文化財保護審議会

発行 佐和田町教育委員会

佐和田町大字河原田本町394

TEL0259-57-2711

印刷 株式会社 佐渡中央印刷所

